

かながわの 民俗芸能

第84号

神奈川県民俗芸能保存協会創立50周年特集号



第2回かながわのお神楽 垣澤社中

神奈川県民俗芸能保存協会

目次

ごあいさつ 協会創立五十周年を迎えて

神奈川県民俗芸能保存協会会長 垣澤 勉 3

神奈川県民俗芸能保存協会創立五十周年記念によせて

神奈川県知事 黒岩 祐治 3

創立五十周年記念に寄せて 民俗芸能の伝統の保存と継承

公益財団法人はまぎん産業文化振興財団理事 大矢 恭好 4

創立五十周年を迎えて

神奈川県民俗芸能保存協会顧問 石井 一躬 4

会員から 神奈川県民俗芸能保存協会五十周年記念に向けて 地元（神奈川県）に根付き、必要とされることの大切さ

茅ヶ崎市郷土芸能保存協会副会長 平野 文明 5

二〇一九 きらめくふるさと かながわ民俗芸能祭特集

箱根仙石原神楽保存会事務局長 勝保 泰彦 6

「きらめくふるさと かながわ民俗芸能祭」記念大会に出演して

吉浜鹿島踊保存会役員 青木 豊 6

「卒業生十人の晴れ舞台」

ちゃつきらこ保存会役員・音頭 及川 比呂子 7

二〇一九 きらめくふるさと かながわ民俗芸能祭 出演にあたって

相模人形芝居林座座長 葉山 修次 7

民俗芸能祭の参加と日ごろの稽古について

浦賀虎踊り保存会囃子方 茂木 鉄也 8

かながわ民俗芸能祭に参加させていただいて

足柄ささら踊保存会前会長 内田 幸子 8

令和元年度 神奈川県民俗芸能保存協会表彰式

表彰された方々の業績

. 9

調査報告

相模人形芝居の歩み——(五) 長谷座

相模人形芝居下中座座長 林 美禰子 11

会員日より

第二回かながわのお神楽公演を見学して

松岡 敬介 16

小田原市小舟の白髭神社の奉射祭（おしやさい）

白井 正子 17

インド・ネパール仏教遺跡をめぐる

祖父川精治 18

事務局から

令和元年度事業報告、令和二年度事業予定ほか

事務局 19

【資料一】 神奈川県民俗芸能保存協会年表（平成十二年度（二〇〇〇年度）～令和元年度（二〇一九年度））

. 21

【資料二】 神奈川県民俗芸能保存協会機関誌総目次（平成十一年度（一九九九年）第64号～平成三十年度（二〇一八年度）第83号）

. 23

「あいさつ」 協会創立五十周年を迎えて

神奈川県民俗芸能保存協会 会長 垣澤 勉

協会は、昭和四十四年七月に創立し、お陰様を持ちまして令和元年、五十周年を迎えました。創立の発起人として、その運営にご尽力された初代会長（故）李家孝氏、二代目（故）永田衡吉氏から引き継がれた三代目（故）後藤淑氏と四代目石井一躬氏のご功績は計り知れない感があります。また、半世紀に亘り民俗芸能の継承及び発展にご尽力され、地道な活動を積み重ねてこられた方々に対し、この節目に当たり、改めて敬意と感謝の意を表したいと思います。また、会長を支えた協会役員、保存会員、民俗芸能祭実行委員、そして、協会の事務局として行政的なご支援を頂いた神奈川県教育委員会（文化遺産課）並びに文化課に対し深く感謝申し上げます。

民俗芸能は地域の長い歴史の中で、人々の絆や地域のつながりによって育まれてきた文化遺産であり、日本人の「心のふるさと」として地域の誇りとするものです。神奈川県内には、全国的に見ても特色のある民俗芸能が数多くありますが、近年他県と同様、経済効率優先のありを受け、地域離れによる過疎化や少子高齢化など生活環境の変化に伴い、その保存と継承が大きな課題とされています。その様な状況下、平成二十三年四月一日を以て協会の事務局が神奈川県教育委員会から離れ、一民間の非営利ボラン

ティア団体として歩むことになりました。

協会が手探りで歩き始めた頃、活動の大きな柱とも言うべき県民俗芸能祭の開催にあたり、幸いにも共催団体として公益財団法人はまぎん産業文化振興財団様により資金面の支援は元より、はまぎんホールの提供、当日のスタッフなどの物的人的支援を頂き、名称も「きらめくふるさと かながわ民俗芸能祭」と改め、令和元年十回目の記念大会を開催することが出来ました。また、財団季刊誌『マイウェイ』においても県内各地域の民俗芸能活動をご紹介して頂きました。県民の皆さんに劇場での鑑賞や季刊誌をお読み頂くことにより、貴重な文化財の存在を知って頂くことが出来たと思います。協会のなすべき活動まで手を差し伸べて頂き感謝の言葉で一杯です。

さて、元号も平成から令和と変わり新たな日本の国のスタートとなりました。東京二〇二〇オリンピック・パラリンピックは、世界中に感染拡大した新型コロナウイルスの影響を受け、令和三年に延期になりましたが、諸外国から沢山のお客様の訪日が予想されます。この機会に日本の歴史や文化を「おもてなし」の心で発信する大変良い機会だと思えます。

最後に、協会の会則を再検証して見たいと思います。特に、第一条、第二条に関し記載します。

（目的）

第一条 本会は、民俗芸能等に関する保護・育成をはかるため、適切な方策を講じ、もつて郷土の民俗芸能等の保存に寄与することを目的とする。

（事業）

第二条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

一 後継者の育成指導 二 啓発事業（機関誌の刊行、研究会、講習会、芸能鑑賞会等の開催・後援） 三 各種民俗芸能等の公開 四 各種民俗芸能等の調査、研究並びに資料の作成 五 関係諸機関及び他団体との連合、連携 六 その他、本会の目的達成に必要な事業となつています。

現在は、この条文の中で、啓発事業のうち、機関誌の刊行（年一回）、芸能鑑

神奈川県民俗芸能保存協会創立五十周年記念によせて

神奈川県知事 黒 岩 祐 治

神奈川県民俗芸能保存協会が創立五十周年を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

会長や役員の方々、そして会員の皆様御熱意と粘り強い御努力の賜物と深く敬意を表します。

また、皆様には、日ごろから、本県の民俗芸能の継承と発展にひとかたならぬ御尽力を賜り、心より感謝申し上げます。貴協会は、昭和四十四年の創立以来半世紀の間、民俗芸能の調査や県内民俗芸能の発表の場となる芸能大会を保存会の皆様とともに成功させるなど、多くの県民の力を結集して、民俗芸能の普及啓発に大きく寄与してこられました。これはひとえに、垣澤会長をはじめ、歴代の協

会会長や役員の方々、そして会員の皆様御熱意と粘り強い御努力の賜物と深く敬意を表します。県内には、本県の多彩な風土から誕生した「地域の宝」と言える数多くの民俗芸能が存在します。節目の年となる令和元年度に横浜で開催された「二〇一九きらめくふるさと かながわ民俗芸能祭」では、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財等に指定されている演目を披露していただきました。県民の皆様には様々な民俗芸能の素晴らしさを十分に感じていただけたことと思います。

人々の生活の中から生まれ、日常の習俗や行事と密接な関係を持つ民俗芸能は、それぞれの地域に生活する方々によって演じられ、伝承を重ねてきた郷土が誇る文化であり、私たちの大切な財産です。

しかしながら、近年、少子高齢化やライフスタイルの多様化に伴って、民俗芸能の保存や継承は喫緊の課題となっております。

こうした中、本県では、かながわグラウンドデザイン第三期実施計画のプロジェクト15「文化芸術」における具体的な取組の一つとして、県内各地域の伝統的な文化芸術を次代に継承していくため、市町村との連携による地域の伝統芸能の発表の場を設け、県内外に発信していくとともに、技術や技能の継承者の育成に取り組んでいます。

創立五十周年記念に寄せて 民俗芸能の伝統の保存と継承

公益財団法人はまぎん産業文化振興財団 理事長 大矢 恭 好

神奈川県民俗芸能保存協会が創立五十周年を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。これまで長きに渡り民俗芸能の継承及び発展に力を尽くされ、地道な活動を積み重ねてこられた協会役員・委員並びに会員の皆様に深く感謝申し上げます。

民俗芸能は地域の長い歴史の中で、人々の絆や地域のつながりによって育まれてきた文化の証であり、地域の誇りとするものがございます。

神奈川県内には、特色のある民俗芸能

また、令和元年十一月に策定した「神奈川県文化財保存活用大綱」においても、民俗文化財に関する取組として、引き続き民俗芸能の伝承活動を支援するほか、貴重な民俗芸能が失われまいよう、現状等を記録する神奈川県民俗芸能記録保存調査を実施しています。

皆様におかれましては、長年、民俗芸能に携わってこられた豊富な御経験を活かし、今後とも本県の民俗芸能の振興に御尽力いただきますとともに、本県の取組にもお力添えを賜りますようお願いいたします。

最後に、この創立五十周年を契機として、神奈川県民俗芸能保存協会のますますの御発展と会員の皆様のご健勝と御活躍を祈念して、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

が数多くありますが、昨今、地域の生活環境の変化に伴い、その保存と継承が大きな課題とされています。

こうした状況のなかで、貴協会の事務局が神奈川県教育委員会から独立された折に、県内の民俗芸能を一堂に観賞できる新しい催しとして、はまぎんホールにおいて、「かながわ民俗芸能祭」を共催者の一員として始めさせていただきます。

この「かながわ民俗芸能祭」は、今年度で一〇回記念大会を迎えることができました。伝統芸能の担い手だけでなく

広く多くの県民の皆さまに観賞していただくことで、ふるさとの貴重な文化財に対する認識を深めていただき、地域コミュニティの創造や再生力を高めるきっかけとなったとすれば、共催者として誠に幸甚でございます。

また、当財団の季刊誌「マイウェイ」では、この催しに合わせて、神奈川県内各地域の民俗芸能活動をご紹介する特集として「かながわ民俗芸能物語」を地域ごとに順次採り上げ、全七巻で県内を一巡してご紹介させていただきます。

マイウェイを通してみますと、県民の多くの方々が民俗芸能の継承及び発展に

創立五十周年を迎えて

神奈川県民俗芸能保存協会 顧問 石井 一 躬

神奈川県民俗芸能保存協会が、この度創立五十周年を迎えたことは誠に喜ばしいことですし、全国的にも稀有なこの組織をここまで存続し得たことには、協会の運営に携わった一員として誇らしくも思います。

これには、もとより発足当初の経緯もあって神奈川県教育委員会文化財保護課（現文化遺産課）の献身的な支援があったこととです。更には県下各自治体の文化財保護行政担当者並びに民俗芸能保存団体等多くの方々に加えての計り知れないご理解とご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

加えて神奈川県が行財政改革を受けて平成二十二年の自立以来、(公財) はまぎん産業文化振興財団並びに神奈川県文化

力を尽くされることは、有形・無形の文化資源を活用することによって各地域が賑わう求心力を生み、地域活性化につながる貴重な役割を果たすことになるかと考える次第です。

これからも、民俗芸能祭の継続開催へのご協力や民俗芸能の保存・継承のお役に立てるよう尽力していく所存でございます。

最後に、この創立五十周年を節目として、神奈川県民俗芸能保存協会の益々のご発展と会員の皆さまのご活躍を心より祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。

課そして事務局担当のボランティア方々には、一方ならずお世話になってきました。中でも(公財) はまぎん産業文化振興財団には協会の目玉事業の一つである民俗芸能祭の立ち上げから現在に至るまで筆舌に尽くしがたいご支援を賜りました。茲に改めて厚く御礼申し上げます。

さて、その芸能祭も十回目の節目を迎え、少々マンネリ化してきた嫌いも否めません。立ち上げからあまり時間が経っていないので、これを軌道に乗せるについて苦労を共にしてきましたということもあってか先例遵守の感があります。そろそろ大胆に趣向を変えてみる必要もあるのかもしれません。また、当初から観賞希望者が多かったこともあって、協会会員優先

粹を確保して会員の皆さんの便宜を図ってきたのですが、応募者数が多かりにも少なかつたり当日のキャンセルが多かつたりと、結果としてこれが重荷となり、円滑な入場者数調整事務の妨げになっていく現状も見直さざるをえないと思います。

また、今期から会長が保存団体(伝承者)から選出されたわけですが、これによってこれまで三代続いた研究者と立ち位置を異にした視点から民俗芸能の現状を捉え、今後のありように新たな提言がなされることを大いに期待したいと思います。

改めて言うまでもなく、これまで幾度となく叫ばれてきた後継者難を中心とした民俗芸能存続の危機的状況は変わってはいません。私も会長就任以前から可能な限り県下の民俗芸能の探訪に努め、時には保存会長さんと意見を交換したことも多々ありましたが、残念ながらこれにはやはり限界がありました。特定の地域・芸能をフィールドとして長年に亘って通い続けて地域の状況を理解する努力を重ねてなければならぬもので、祭りに当日に多忙を極めている保存会長さんか

らじつくりと話を聞こうとしてもそれは所詮無理な相談です。こうしたことも含めて、後継者難をどう解決するのかという極めて難しい課題に真剣に取り組まなければならないという大きな責務を負っていることを新会長には常に自覚してほしいことの一つです。

そのためには、県教委は何もしないなどと県教委を声高に非難することで、自己の存在を誇示しようとする劇場型パフォーマンスとは訣別して、民俗芸能伝承者として、(何をどうすべきなのか、協会はどこまで協力できるのかといった具体的・建設的な提案をして、より良い方向を見出してゆく前向きな行政との向き合い方を探ってほしいと思います。と同時に地域で孤立した団体会員として会費の納入ままならないという切実な愁訴にも耳を傾け、こうした問題を協会全体でも共有化して何らかの解決策を探る度量をもち、伝承者・研究者が一体となって行政と肩を組み合った緊密な絆を軸とした堅固な組織として創立百周年を目指してほしいと願っています。

会員から 神奈川県民俗芸能保存協会五十周年記念に向けて 地元に根付き 必要とされることの大切さ

茅ヶ崎市郷土芸能保存協会 副会長 平野 文明

県の保存協会の発足は昭和四十四年で、今年度は五十周年に当たるとのこと、まずお祝い申し上げます。

県協会と背比べをする訳ではないが、私が所属する茅ヶ崎市郷土芸能保存協会の発足は同五十一年(一九七六)で、当

中止した年が一回あり)。

この半世紀を振り返ってみると、茅ヶ崎市の保存協会では、途中で消滅した芸能があつたり、後継者問題に直面したり、大会時に観客が集まらなくて悩んだりしたこともあつた。県保存協会でも同じ問題を抱えたことあつたのではないだろうか。と拝察するものだが、茅ヶ崎からも県の芸能大会に出演させて頂いたりして、できるかぎりの応援はしてきつたりして、

芸能大会となれば、ほとんどが舞台上での上演となる。各芸能の保存会では、普段の中で練習を積み、また機会あるごとに地元での披露を重ねておられる。そして、年に一度の芸能大会が晴の舞台となっている。

長年、各保存会とお付き合いをさせて

頂いていて思うのだが、芸能の保存には、練習も欠かせないが、地元での出番がそれに劣らず重要であるなあとということである。地元での出番が多いと言ふことは、それだけ地元で必要とされているということであり、必要とされている限り、消滅することはない。茅ヶ崎では、そういう地元の熱意も預かつて、毎年の芸能大会は大盛況である。

神奈川県民俗芸能保存協会のホームページによると、協会は、川崎・横浜・横須賀・相模原をはじめ各地域のたくさんの方の団体会員を擁し、遠くは館山市からも参加しているとある。各団体がそれぞれの地元で根付き、そして年に一回開催の「かながわ民俗芸能祭」が今後ますます晴れやかに、かつ長く続けられることを願っております。

二〇一九 きらめくふるさと

かながわ民俗芸能祭特集

神奈川県民俗芸能保存協会創立五十周年・民俗芸能祭十回 記念公演

令和元年十二月一日(日)、横浜市西区みなとみらいにある「はまぎんホール ヴィアマール」に於いて、「二〇一九 きらめくふるさと かながわ民俗芸能祭」を開催しました。

今大会は、本協会創立五十周年と民俗芸能祭十回目の記念事業として、国指定、国選択の六団体の芸能を一堂に会し、観覧していただきました。

ここに協会スタッフ一同、開催に際してご支援とご協力をいただきました、公

益財団法人はまぎん産業文化振興財団、神奈川県、県内各教育委員会、ボランティア、アスタツフの皆さんに、心より御礼申し上げます。

二〇一九 きらめくふるさと
主催：神奈川県民俗芸能保存協会
共催：神奈川県、公益財団法人はまぎん産業文化振興財団

後援：神奈川県教育委員会、横須賀市教育委員会、三浦市教育委員会、厚

「きらめくふるさと かながわ民俗芸能祭」 記念大会に出演して

箱根仙石原神楽保存会事務局長 勝 俣 泰 彦

本芸能祭は「神奈川県民俗芸能保存協会設立五十周年記念」かながわ民俗芸能十回記念」として開催され、本芸能祭に神奈川県内に数ある無形民俗文化財の中から、選ばれたことは名誉であり会員一同誇りに思っております。

「箱根の湯立獅子舞」は、伊勢大神楽系獅子舞が「湯立の行」を行う事が全国的にも希少であることから、昭和二十九年に神奈川県が無形文化財「箱根の湯立獅子舞」として指定、昭和四十九年に国選択無形文化財として指定されました。

古くから伝わる神楽字引によりますと、この神楽舞は安永五年（一七七六）甲斐国郡内下吉田村（現在の山梨県富士吉田市）の萱沼儀兵衛氏によって伝えられたとされ、昔は仙石原青年団が「湯立神楽」としてこの舞を伝承してきました。現在は「箱根仙石原神楽保存会」が、五穀豊穰・無病息災を願い、毎年三月に諏訪神社、五月に金時神社の例大祭において奉納しております。

湯立獅子舞は火を焚いた湯釜を使う神事であり、その所要時間は二時間に渡ります。今回は場所や設備等の都合により湯立の行の七舞の内の一舞、悪魔を払う舞で「剣呑み」を披露させて頂きました。「遊び神楽」は神事神楽から離れ、村人が娯楽としてこの神楽で遊んだと伝え



湯立獅子舞

られております。

この神楽には、「剣呑み」「柳遊び」「毬遊び」「かえる遊び」「火炎吹き」「四つ足」「ぼたんかがり」があったと伝えられており、この内、現在復元出来ている舞は「剣呑み」に留まっておりますが、この神楽が復元出来ている団体は他団体では例がなく、箱根の仙石原地域だけあります。

遊び神楽は披露する機会が少なく、舞方や下方においても伝承者が限られている事から、機会があれば出来る限り披露するようにしております。

今回、芸能祭に出演が出来ましたことに、民俗芸能保存協会及び舞台等の関係者各位に感謝を申し上げますと共に、今後とも稽古に精進し継承者の育成に努力して行く所存であります。

二〇一九かながわ民俗芸能祭に参加して

吉浜鹿島踊保存会役員 青木 豊

かながわ民俗芸能祭に参加させていただき、誠にありがとうございます。

吉浜の鹿島踊としては、二〇〇九年（平成二十一年）十二月に県立青少年センターホールに於いて開催された「かながわ民俗芸能大会」に出演して以来、十年振りに参加させていただきました。

鹿島踊りは、常陸国（現在の茨城県）鹿島神宮神人の教養・芸能であったらしく、鹿島の事触れという諸国巡遊の神人の芸風が染み付いていながら、念仏踊りのような舞態も加わっているといわれます。

鹿島踊りの名をもつ芸能は、神奈川県小田原市の石橋から相模湾沿岸を西に湯河原町まで十カ所、更に静岡県熱海市初島から伊豆東海岸に沿って東伊豆町北川まで十一カ所、併せて二十一カ所で確認されています。神奈川県西部から静岡県伊豆半島東海岸に繋がる特異な地方色の強い民俗芸能といえます。

吉浜の鹿島踊は、八月一日の素鷲神社の例大祭の折に演じられます。この祭日は、昭和三十年代に湯河原町内の七つの氏神社の祭礼を、当時の婦人会を中心とした生活改善運動の掛け声のもと、一勢にこの八月一日に執り行うこと（統一祭り）として以来の日取りで、それ以前は七月十三日、十四日に踊られていました。なお、江戸時代には素鷲神社は牛頭天王社と記されており、もとは六月十四日の祭礼でありました。

当鹿島踊は、今日吉浜鹿島踊保存会に

よって継承されています。それは、当該伝承が昭和二十九年に神奈川県無形文化財に指定されて以降のことで、その以前は地域の若者組の重要行事として執り行われていました。ともあれ若者組としての祭りに関わる伝承は今も失われていません。保存会としてはできるだけ若年世代の加入を勧めています。

現在、保存会では本来必要とされる二十五人の演者を確保することが難しく、実際の上演では人数を減らして実施しています。保存会でも地域に声かけをして演者の確保に努めていますが、なかなか演者数の増加に繋がっていかないのが現状であります。また、会員の多くが六十代以上であり、どのように次の世代



鹿島踊り

へ継承していくかという点も課題としてあります。このように吉浜の鹿島踊は次

卒業生十人の晴れ舞台

ちゃつきらこ保存会役員・音頭 及 川 比呂子

チャッキラコは、毎年一月十五日の小正月に三浦市三崎の仲崎・花暮地区や海南神社で、豊漁・豊作や商売繁盛などを祈願する女性のみで踊る民俗芸能の一つです。年配の女性が『音頭』として唄い、幼稚園・保育園〜小学校六年生までの少女が踊ります。踊りは、「ハツイセ」、「チャッキラコ」、「二本踊り」、「よささ節」、「鎌倉節」、「お伊勢参り」の六種類があります。舞扇とチャッキラコ（綾竹）を演目に応じて使い分け、楽器類は伴わず、素唄と囃し言葉だけの素朴な唄と踊りです。華やかさや目を引く仕掛けのない、その素朴さこそがチャッキラコの魅力だと感じています。

奉納は、地域で本宮もとみやと呼ばれ親しまれ



チャッキラコ

の世代へ向けた継承の方策を考えなければならぬ転換期を迎えています。

ている小さな祠前で踊るのをスタートとし、海南神社境内の奉納、チャッキラコの淵にあり、海と城ヶ島、城ヶ島大橋を望む仲崎竜神様と花暮宮様の祠前で踊りを奉納して回ります。一月なので小雪がチラチラ舞う年もあり、踊り子の小さな手がかじかんで扇を落としてしまうこともあります。指が冷えて真つ赤だもの」と、応援してください。温かい声が聞こえてきます。

新聞などのインタビューを六年生が受けることがあります。よく聞かれるのが「練習はどのくらいやったのですか?」お尋ねくださる方は、たくさんの時間を練習に費やしたとの答えを期待しているでしょう。六年生は清々しい顔で答えます。「一週間です。」そうなのです。練習期間は本番前の七日〜十三日のみです。初めて大きな扇を手にした年中さんは、扇をひらひら動かすだけで精いっぱいです。夕方の練習でとうとう眠くなってしまう子もいます。それが、毎年の積み重ねで高学年になる頃には、堂々と立派に踊ることが出来るのです。その六年生が今年も十人いました。同じ学年の踊り子が十人揃うことはまずありません。舞台のスペースを考え、今回は六年生十人で舞台上がりました。幼いころのあ

どけない姿から、毎年会うたびの成長を見てきた十人の六年生。ライトを浴びて堂々と踊る姿は、神社の境内や屋外での奉納とはまた一味違い、本場に晴れがま

二〇一九きらめくふるさと出演にあたって

今回、二〇一九きらめくふるさとかながわ民俗芸能祭に出演させていただいた感想として、民俗芸能を大事に、楽しみにしていた方が沢山いて、本場に熱心に芝居を見ていただき、嬉しい限りです。芝居だけではなく、人形と「ふれあう」時間については、「私の方にも来て!!」と、声をかけていただいたりして、人形がスターなのに、私自身がスターになった気分になってしまいました。それほど、愛されていてありがたかったです。

私達、人形芝居は厚木市の林という場所です。三百年以上前から伝えられている人形芝居です。伝統文化というものはその時々、沢山の苦しみや困難があり、それ乗り越えて、楽しみや喜びを感じられるような文化を継承しているものだと思います。その長い歴史の中の「ほんのいつととき」でも、伝える人がいなくなれば、一瞬で無くなってしまふものも伝統文化だと思います。そのような重責を持ち、継承していくために、楽しんで練習や公演など、活動をしている、「相模人形芝居 林座」でございます。

日々は、毎週、地域の自治会館や、公民館をお借りして、楽しみながら稽古を行うのと、一ヶ月に一回程度、各小学校や、公民館、地域施設において、公演活

しく見えました。一月の奉納が終わると六年生は卒業です。今回いただいた機会が、六年生の卒業記念の舞台となりました。ありがとうございました。

かながわ民俗芸能祭

相模人形芝居林座 座長 葉山修次



相模人形芝居

動も行っております。

いま、林座においては仲間が少なくなっているのが現状です。人形芝居を楽しみながら活動をしていける環境を作っていかないといけないと思っております。沢山の仲間と一緒に人形芝居をして、沢山の心に残るような公演をしていければと思っていますので、ぜひ、ご興味がある方がいらっしやいましたらご連絡いただければ幸いです。

この度は、「二〇一九きらめくふるさとかながわ民俗芸能祭」に出演させていただきます本場にありがとうございました。

民俗芸能祭の参加と日ごろの稽古について

浦賀虎踊り保存会 囃子方 茂木鉄也

この度は「二〇一九かながわ民俗芸能祭」に参加させていただきありがとうございました。

浦賀の虎踊りは今から三百年ほど前、伊豆下田から奉行所が浦賀に移された時とともに移り住んだ人々によって伝えられたといわれています。近松門左衛門作の人形浄瑠璃『国姓爺合戦』の虎退治を題材にしており、主人公の和藤内と親子二頭の虎、さらには唐子踊りを加えた一幕ものとなっております。出演者は約三十名、裏方や出演児童の保護者も合わせると総勢約五十名の大所帯となっております。五、六歳の唐子役から上は囃子方や裏方の七、八十代まで元気に活動しております。わたくしは年齢的にはちょうど中間の四十代ですが、囃子方として参加するようになってから十数年のまだまだ駆け出しです。

平成二十六年のかながわ民俗芸能祭に続き、今回出演機会をいただき当保存会メンバーも期待に応えるべく稽古を重ねて参りました。

年齢層が幅広く人数も多いのですが長老から若手へ、また若手から子どもたちへと稽古つける様子は、おそらく当地に虎踊りが伝わった江戸時代から続いている光景ではないかと思っております。ここ数年唐子踊りを卒業した子のなかには、中学生二十歳前後になった現在も囃子方として三味線や笛を習い、同時に小学生へ唐子踊りの指導もしております。また和藤内や子虎役の小中学生男児が大きくなり、最近では



浦賀虎踊り

大虎役を受け持つようになったこと、さらに大虎役を終えた成人男性が太鼓を習い囃子方になったことなど、ほかにもありますが自分の教わったことを次の世代に教えながら、自らも新しいことを教わり覚えていくという事例が増えております。生涯学習と同じようなスタイルで、何歳になっても技能の習得向上、伝統文化にふれ合えることは大変貴重でありがたいことだと実感しております。

先人たちが代々伝え発展させてきた虎踊りをこれからも浦賀の郷土文化として継承・発展させていけるように、人々との繋がりを大切にしながら今後も日ごろの稽古に精進していきたいと思っております。

かながわ民俗芸能祭に参加させていただいて

足柄ささら踊保存会前会長 内田幸子

このたびは、かながわ民俗芸能祭五十年記念大会に参加させていただき誠にありがとうございました。国選択の芸能ということで、二回目の出演の機会をいただいたことに重ねて感謝申し上げます。

足柄ささら踊は、南足柄市に残る数少ない伝承芸能の一つです。江戸時代から明治・大正まで、少女たちが踊る盆踊りとして関本を中心にその周辺の地区で盛んに踊られていましたが、盆踊り禁止令により踊ることができなくなりました。しかし昭和二十九年に当時の婦人会の方々が、踊りを伝承していた古老の方々から直接踊り、歌、楽器などの指導を受け、ビンザサラを用いるところから「足柄ささら踊」と称し、保存継承してきました。足柄ささら踊の元をたどると、信州木曾洗馬村の七夕踊りに源を発するといわれています。その七夕踊りが江戸に入り小町踊りという少女たちの風流踊りとなり、やがて江戸文化の最盛期に足柄道や碓氷道の宿駅の関本に伝わり、同時に信州からも七夕踊りが伝わり、両者が合流して生まれた美しい踊りが足柄ささら踊であると考えられています。ささら踊は旧相模国域に分布しており、足柄ささら踊を含む六市八団体で構成する相模ささら踊連合会により相模ささら踊大会を、毎年一回七月に各団体所在地において、輪番で開催しています。相模ささら踊大会では会場中央に七

夕飾りを置き、歌い踊ります。ビンザサラをつけて踊るのは田植に関する踊りが多く、ささらの音が蛙の鳴き声に似ているところから、稲を育てるために欠くことのできない雨を呼ぶ蛙の鳴き声に発しています。足柄ささら踊の所作には、田植のすんだ田んぼの上を風がそよぐ様子や、稲刈り、米俵を肩に担ぐ稲作の様子が多く、「中沼の太鼓踊り」では、太鼓とバチを地面につける田植の所作があります。そして歌では「西に明神、東に酒匂、中の足柄米所」や、「揃った揃たよ踊り子が揃た、稲の出穂よりよく揃った」など、豊作を祈って歌い踊ります。

前回同様に、舞台関係者やスタッフの



足柄ささら踊

方々、保存協会の皆様は大変お世話になりました。会場の皆様からの大きな拍手に、会員一同、感謝し感動いたしました。私たちは、このすばらしい伝統芸能を絶やさず伝えてゆくために、後継者の育成に努力してゆくつもりです。

令和元年度 神奈川県民俗芸能保存協会表彰式

民俗芸能の保存継承と普及活動に対する長年の貢献と努力に敬意を表し、その功績を讃えるため、令和元年六月九日(土)に、神奈川県立地球市民かながわプラザにおける総会にて表彰式を行いました。

令和元年度は次の二十名の皆様を表彰させていただきました。(敬称略)

- 柴田 定満 福田神社囃子獅子舞保存会
- 永野 弘 柳島大漁船上げ唄好友会
- 小川 幸彦 柳島大漁船上げ唄好友会
- 小川 勝 柳島エンコ口節保存会
- 江川 和夫 浦賀虎踊り保存会
- 江川 三枝 浦賀虎踊り保存会
- 臼井 良子 相模里神楽垣澤社中
- 小川 新次 上和田双盤念仏保存会
- 高木 巖 ちやつさくらこ保存会
- 鈴木 一也 太田和上氏子青年
- 柏倉 怜美 太田和上氏子青年
- 碓井 洪司 寺尾ばやし保存会
- 三枝木 信義 平戸古民謡保存会
- 宮城 勉 川崎沖繩芸能研究会
- 阿波連とも子 川崎沖繩芸能研究会
- 江藤 一雄 小田原囃子多古保存会
- 三浦 実 箱根宮城野ばやし保存会
- 鈴木 富雄 鶴見田祭り保存会

この舞台を用意してくださいました神奈川県民俗芸能保存協会の皆様、公益財団法人はまぎん産業文化振興財団の皆様、お世話になりましたスタッフの方々に、心より感謝しお礼申し上げます。

- 中村 英雄 鶴見田祭り保存会
- 寺村 和成 鶴見田祭り保存会

表彰者された方々の業績

柴田 定満 様 七十九歳

(福田神社囃子獅子舞保存会)
昭和四十八年に保存会へ入会し、踊りと太鼓の二役を達成されました。四十五年間、郷土の芸能の保持・発展に寄与し、

平成二十四年から二十九年までの六年間は保存会長を務め、後継者育成に貢献されました。現在は相談役として会員相互のまとめ役で活躍されています。

永野 弘 様 七十九歳

(柳島大漁船上げ唄好友会)
昭和六十一年に茅ヶ崎市郷土芸能大会へ出演し、翌年の好友会の発足に参画、後継者育成に尽力されました。平成十年代に地元の中学校の課外活動に参加し、会を担っていく若い世代との交流を図りました。十四年から十五年まで会長として会の発展に貢献されました。

小川 幸彦 様 七十四歳

(柳島大漁船上げ唄好友会)
昭和六十一年に茅ヶ崎市郷土芸能大会へ出演し、翌年の好友会の発足に参画、後継者育成に尽力されました。平成十年代に地元の中学校の課外活動に参加し、会を担っていく若い世代との交流を図りました。十六年から十七年まで会長として会の発展に貢献されました。

小川 勝 様 七十六歳

(柳島エンコ口節保存会)
平成十二年に保存会に入会し、市立中島中学校でエンコ口節を指導、交流を図られました。二十八年と二十九年に会長を務め、平塚市や二宮町の郷土芸能の記念大会へ出演するなど保存・継承に努められました。

江川 和夫 様 七十一歳

(浦賀虎踊り保存会)
四歳から五歳ころに保存会で父親の演奏を聞き、篠笛を覚えられました。昭和三十四年の小学校六年生のころ、篠笛で初舞台を踏まれました。現在、囃子方を

中心的な存在でまとめ、後継者育成にも熱心に取り組み、自身の四人のお孫さんも和藤内、唐子、小虎遣いとして関わっていられます。平成二十八年には地元小学校の課外活動事業に参加し、保存会を担う子どもたちとの交流を図りました。

江川 三枝 様 六十八歳

(浦賀虎踊り保存会)
昭和四十八年に三味線を習い、保存会へ入会されました。入会当時は口伝であった楽曲を譜面にし、後進が覚えやすいように貢献されました。娘さん二人にも三味線を教え、平成二十年には娘さんたちも後継者として入会されました。現在も三味線部門の中心として活躍されています。

臼井 良子 様 六十二歳

(相模里神楽垣澤社中)
平成十六年に垣澤社中に入会し、主に舞方を担当し神楽の基本となる御神前之舞(七座の舞)を習得、本番の経験も積まれました。女性の神様を演じる機会が多い中、男性の神様役にも挑戦されています。囃子方として主に大太鼓を担当し全ての曲目を習得、技芸の研鑽に励んでいられます。また、装束の準備、着付け、片付けなどの裏方も務め、社中の伝統文化の継承と活動拡大に向け力を注がれています。

小川 新次 様 八十三歳

(上和田双盤念仏保存会)
昭和三十年から双盤念仏の練習を始め、五十一年の保存会の結成に尽力されました。平成十五年からは保存会の役員として、二十年から七年間は会長として会の運営に携わり、地元自治会や市の担当部署とのパイプ役として発展に努めら



記念写真

れました。現在は、相談役として新入会員の指導に当たっていられます。

高木 巖 様 七十八歳

(ちゃつきらこ保存会)

平成十四年度から二十二年度まで保存会の副会長を、二十三年度から二十九年までは会長を務められました。その間、ユネスコ無形文化財「代表一覧表」の登録や、各種の郷土芸能大会への出演、第五十六回関東ブロック民俗芸能大会に出演されるなど、保存会を牽引されました。平成三十年三月からは顧問として、保存会を支えられています。

鈴木 一也 様 五十六歳

(太田和上氏子青年)

十五歳で氏子青年に入り、太鼓、鉦を習得されました。現在は、後継者育成に努めるとともに、地元の太田和三浦正八幡宮の春、秋季例祭にて活躍されています。横須賀市民俗芸能大会には昭和五十八年から出演し、その他、障害者施設の行事などでの公演に出演されています。

柏倉 怜美 様 三十五歳

(太田和上氏子青年)

小学校三年生から太鼓を習い、現在に至っています。地元の太田和三浦正八幡宮の春、秋季例祭や新年を迎える行事にて活躍し、横須賀市民俗芸能大会や障害者施設の行事などでの公演に出演されています。

碓井 洪司 様 七十八歳

(寺尾ばやし保存会)

昭和六十四年から会員として、はやしの技術の習得や指導伝承、器材の修理、管理等に努め、寺尾ばやし独特の「バカ面踊り」を伝承し、披露、普及に努められました。

た。平成十七年からは会長として副会長も兼任し、会の運営に努められました。その間、会の存続の危機がありました。会長として会を盛り上げ、保存会を継続されました。

三枝木 信義 様 九十二歳

(平戸古民謡保存会)

保存会に平成元年四月に入会し、十五年四月から二十九年三月まで会長を務められました。その間、会長として会員のまとめや後継者育成に努め、現在は毎月の定例会で芸、歌にと全般にわたり指導的立場で、積極的に現会長を支えられています。

宮城 勉 様 七十七歳

(川崎沖繩芸能研究会)

昭和五十二年研究会へ入会し、研究会主催の沖繩芸能大会に毎年出演されるとともに、多数の弟子を指導し、川崎文化祭奨励賞など複数の賞を受賞されました。現在は、自宅等にて沖繩三線東林間倶楽部の指導をされています。平成二十四年から三十年には、当研究所の副会長として運営に携わり、三線部副部長としても三線部門をまとめるなど積極的に会長を支えられています。

阿波連 とも子 様 四十八歳

(川崎沖繩芸能研究会)

昭和五十一年研究会へ入会し、研究会主催の沖繩芸能大会に毎年出演するとともに、後輩の指導に当たり、平成六年には川崎市文化祭奨励賞を受賞されました。多くの公演に参加され、平成十九年と二十四年には自主公演を行い、沖繩の文化、舞踏の継承に尽力し、二十年から三十年まで、研究会会計監査として会の運営に携わり、会長を積極的に支えられました。

江藤 一雄 様 六十一歳

(小田原囃子多古保存会)

昭和四十二年、保存会子供班に入会し、五十一年には神奈川県民俗芸能大会に青少年部の大太鼓奏者として出演されました。また、関東祭ばやしコンクールで準優勝を受賞するなど以後、数多くのイベントに出演されました。平成十六年度から二十一年度までは保存会副会長を、二十二年度から二十九年度までは第六代会長として会の発展に尽くされました。三十年からは相談役となり保存会の運営を補助し、また奏者として活躍されています。

三浦 実 様 六十四歳

(箱根宮城野はやし保存会)

平成元年に宮城野はやし保存会に入会し、七年からは副会長として会の運営に携わり、将来の保存会を担う地元の子どもたちへの指導をされました。十七年から現在まで会長として、会員をまとめ、宮城野ばやしの伝承、普及や後継者の育成に幅広く貢献されています。

鈴木 富雄 様 七十六歳

(鶴見田祭り保存会)

明治四年を最後に途絶えていた「鶴見田祭り」の復活再興に関わり、台本の「神寿歌」の執筆・編集に携われました。百十六年ぶりに再興した「鶴見田祭り」初公演の昭和六十一年から平成元年まで稲人役を務める一方、神寿歌の演者の育成に力を注がれました。二年創設の保存会に参加し、毎年四月に行われる「鶴見田祭り」の準備、運営に協力し、また、毎年発行の小冊子『田祭り』の編集を担当されました。十八年から保存会副会長を務め、地元自治会など

と協力して、年中行事への定着、発展に貢献され、二十九年には第三十七回ポラ伝域民俗文化財登録へとつながりました。

中村 英雄 様 七十六歳

(鶴見田祭り保存会)

明治四年を最後に途絶えていた「鶴見田祭り」の復活再興に、潮田囃子保存会会長として関わり、田祭りや歌われる神寿歌の音取りや節付の研修を担当されました。六十一年の初公演、神寿歌の完成後、平成二年の保存会設立に参加、役員と囃子方の大拍子や太鼓の音頭取りの世話役をされました。十一年からは、道化役のお鶴など重要な役割を担っていられます。さらに、潮田囃子保存会を結成し、会長として昭和五十四年に横浜市無形民俗文化財の指定に導くなど、芸能の継承に貢献されています。

寺村 和成 様 七十五歳

(鶴見田祭り保存会)

明治四年を最後に途絶えていた「鶴見田祭り」の復活再興に参加し、千百年以上前から「鶴見田祭り」を起源とした国の重要無形民俗文化財の東京都板橋区の徳丸神社や諏訪神社の「田遊び」を参考に神寿歌の演技を完成することに尽力されました。平成二年の保存会創立時から委員として参加し、稲人役を演じ、四年からは保存会の役員として、また、十一年から二十八年までは作大將役を務め、後進の養成にも力を注がれました。演技の改良や工夫を行うなどにより、二十九年の第三十七回ポラ伝域民俗文化財への登録へ導かれました。

※内容は元年四月一日現在のものです。

相模人形芝居の歩み——調査報告(五) 長谷座

相模人形芝居下中座座長 林 美禰子

連載の五回目は、長谷座を取り上げる。

筆者(林)は、昭和三十九年(一九六四)に青柳暁子氏と共に、初めて相模人形芝居林座・長谷座・下中座の三座を訪れ、約三年かけて昭和四十二年(一九六七)に卒業論文「相模人形芝居の研究」江戸系人形浄瑠璃考察のために」をまとめた。その調査に快く応じてくれたのが、当時の長谷座副座長・会田鶴由氏であった。そのため長谷座の公演に足繁く通い、昭和四十一年(一九六六)八月には八日間、会田鶴由氏宅に泊まり込み、人形の研修を受けた。また筆者は、昭和五十三年(一九七八)から五十九年(一九八四)まで、長谷や隣接の愛名に住み、長谷座の活動に参加していた。したがって、その間見聞きした生の情報も交えて報告する。

一 長谷座の人形の成立について

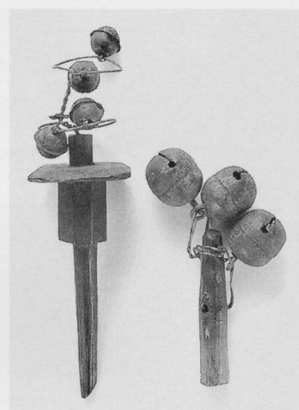
厚木市は、相模川と大山街道による交通の要で、非常に豊かであり、現存する林座、長谷座の他にも、妻田、上古沢、三田、戸室村の四方所に人形座があったとされている(永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌 下』「第九篇 人形芝居」昭和四十三年(一九六八)三月 錦正社、同日本の「人形芝居」昭和四十四年(一九六九)



白尉面、黒尉面 (写真提供 厚木市教育委員会 長谷座蔵)

三月 錦正社、『神奈川県文化財鑑無形文化財民俗資料篇』昭和四十八年(一九七三)三月 神奈川県教育委員会。

江戸時代の妻田村や近在の名主や医師の日記には、祭礼操見世物や人形の稽古の記事などがあり(『厚木市史民俗編(2)村の暮らし』第八章 娯楽としての芸能 第一節 人形芝居)平成二十九年(二〇一七)三月 厚木市、人形浄瑠璃が非常に盛んだったことが、よくわかる。長谷の人形の始まりについては、興味深い伝承がある。長谷の堰神社に、木箱に入れた白尉・黒尉の仮面がある。この仮面は阿波・淡路系の人形芝居には必ず

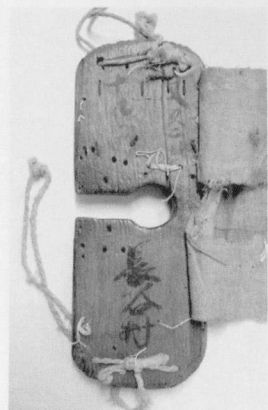


鈴 (写真提供 厚木市教育委員会 長谷座蔵)

付随するといわれる。

淡路人形芝居の式三番叟は能の翁、千歳、三番叟が移されたものといわれる。能において翁の白尉面、三番叟の黒尉面が神聖視されるように、人形芝居においても、式三番叟と尉面は神聖視され、他の人形とは別の箱に入れられ、神社などに保管される習わしであった。この仮面については、安永年間(一七七二～一七八〇)、長谷観音堂に保管されていた人形・衣装類が火災のため焼失したが、仮面と鈴がわずかに焼け残ったので神社に保管されるようになったと伝えられている。この仮面の存在により、長谷の人形は安永以前に始まっており、淡路から伝わったとみられる。

他に、古い物証としては、文久二年(一八六二)の日付のある肩板があげられる。この肩板には「文久二戌年十月日長谷村」の墨書がある。



肩板 (文久二年) (写真提供 厚木市教育委員会 長谷座蔵)

二 幕末から明治にかけて

長谷座で幕末に教えを受けたとして名が伝わるのは、西川伊三郎が最も古い。長谷福昌寺の住職の妻が大阪の出身で西川伊三郎と友人だったため、大阪より伊三郎を呼んで福昌寺内で稽古をつけてもらった。嘉永四年(一八五二)頃から約四年間であったという。

〈西川伊三郎に指導を受けた方々〉

山口太郎左衛門 石射平造 高橋民造 石射藤三郎 飯田市造 山内作兵衛 城所源左衛門 山口俊助 会田伝次郎 石射市右衛門

次に名があがるのは、明治十六年(一八八三)に隣の林村で没した吉田朝右衛門である。現在も林の福伝寺墓地内に建つ墓碑の台座側面に「長谷村 吉田連」と刻されており、長谷村の人形も朝右衛門の指導を受けていたと考えられる。また、昭和二十九年(一九五四)永田衡吉氏の聞き取り調査で、当時九十一歳だった山口要助氏は十五歳の歳に初めて吉田朝右衛門師匠に習ったと語っている。その頃は、山口太郎左衛門氏の家の土間に板を張って稽古場にしていたという(前掲、永田『神奈川県民俗芸能誌 下』)。

〈吉田朝右衛門に指導を受けた方々〉

山口太郎左衛門 山口俊助 会田伝次郎 山口鉄五郎 飯田忠造 山口要助 滝口良助 武井峯吉

三 明治後期から昭和にかけて

前章で述べたように、長谷では安永の

火災により、ほとんどの人形用具を焼失した。その後、村の若い衆が相談のうえ、カシラ・衣装などを買い整えた。したがって、所有権は若い衆にあって、これを借り出して公演した場合、損料として興行収入の三割を納めるという約束があった。

そこで、人形連の山口要助、飯田忠造、山口鉄五郎は金を出し合って明治三十六年（一九〇三）頃、人形用具を買い求めたという。山口要助氏の息・山口基次氏（明治二十年（一八八八）〜昭和三十六年（一九六一））の話によれば、隣村の上古沢からも人形を買い入れたという。また大神村（現・平塚市）の人形は、伊勢原の道具屋の手を経て買い取り、古い人形箱に「大神村」の文字も残っていたようである。同じく山口基次氏によれば、山口鉄五郎氏が昭和十三年（一九三八）に八十四歳で亡くなった時、基次氏を枕元に招いて「俺たち三人でこしらえた人形は、ぜひお前んとこで長く保存して、後々まで伝えてくれ」と言った（『厚木市文化財調査報告書 第一集』昭和三十五年（一九六〇）三月 厚木市教育委員会）。

それまでは人形を順番で保管してきたが、その時以降、山口基次氏の息・寛造氏が亡くなった平成十三年（二〇〇一）まで、山口氏宅で保管されていた。

吉田朝右衛門の死去以降、西川伊左衛門、杉山伴吉、山口由太郎がやって来て指導した。西川伊左衛門（前名、西川伊三子）は、明治三〇年代から地方巡業を続け、相模各地の人形座の指導もしていたが、明治四十一年（一九〇八）に小竹に移住した。大正三年（一九一四）頃から、林や長谷に

も指導に来た。妻の語女大夫（本名、よし）は、三味線を弾き、義太夫や三味線を教えた。伊左衛門はカシラの修理・製作も行った。下中座二代目座長・小澤孝蔵氏宅では、大正七年（一九一八）から大正十二年（一九二三）に関東大震災で家屋が倒壊するまで、自宅の納屋に伊左衛門一家を住まわせていた。後になって孝蔵氏は、「伊左衛門は長谷座から多くのカシラの修理を頼まれ、納期に間に合わないときなどは自作のカシラを納めていた。長谷座に伊左衛門作のカシラが多いのはそのためだ」と言っていた。

（西川伊左衛門に指導を受けていた方々）
石射弥助 石射隆芳 飯田正治 武井正輔 山口要助 山口基次

西川伊左衛門が昭和七年（一九三二）に亡くなった後、長谷座は林の杉山伴吉の指導を受けた。杉山伴吉は、吉田東九郎の指導を受けた人である。林からは杉山伴吉の前にも、吉田朝右衛門の指導を受けた山口由太郎が指導に来ていた。（杉山伴吉に指導を受けた人々）

加藤正吉 関野政司 中村安造 会田鶴由 高橋貞雄 神崎正雄 石射重雄 山口寛造

四 長谷座の誕生

昭和二十六年（一九五一）、当時神奈川県文化財専門委員だった永田衡吉氏が、相模人形芝居の調査で各座を訪ねた。永田氏の調査により長谷の人形の価値に気づいた南毛利村は、村をあげてその保護・育成に乗り出した。昭和二十六年（一九五一）には村長などを発起人に

した後援会が組織された。長谷の人形も長谷人形座芸能人組合として人形・三味線・太夫の三業をまとめた組合として組織された。

しかし、昭和二十八年（一九五三）十二月二十八日に、神奈川県無形文化財の指定を受けると、ともに指定を受けた林や小竹の人形座と同じく、人形遣いの座として、指定当時の村名により南毛利人形座と称した。昭和三十年（一九五五）の厚木市への合併に伴い長谷人形座と改称し、現在は長谷座と改めている。

戦争前後から昭和三十年代の長谷座について、山口朋彦氏（昭和九年（一九三四）〜）に聞いた。一回目は平成十九年（二〇〇七）七月七日、二回目は平成二十七年（二〇一五）である。二回目については、大谷津早苗・林美禰子『昭和女子大学文化史研究』第二〇号「相模人形芝



堰神社（撮影者 筆者）

居五座聞き書き―戦後の様子と鉄砲ざし―平成二十九年（二〇一七）三月、に詳しい。長谷地区は、歌舞伎が盛んであった。明治二十六年（一八九三）には、長谷の堰神社の大修理があった。その頃、舞台と中道具（屋台のこと）を作った。写実的な絵を一流の絵師が描いたという。

戦後、青年団が神社の祭礼に行う余興のプロデュースを担当した。本祭には、普通は歌舞伎のプロしか出演できなかった。前年の農作物の収穫量が豊かで災害がないと、大盤振る舞いと称して厚木の市川柿之助一座や三升源五郎一座を呼んだ。普通は厚木の市川和三郎一座や秦野の坂東調之助一座を呼んだ。それらが都合がつかないと座間の比留間一座や平塚の東屋三吾劇団ほか厚木の新派劇団を呼んだ。前夜祭で長谷の人形座が舞台上がり、いつも大盛況だった。

青年団は地芝居の流れを汲んでいて、歌舞伎の道具係がいた。他の地域での芝居興行にも、道具を持参して舞台設置を請け負うことも多かったという。昭和三十年代半ばまで、舞台も中道具もあったという。青年団には地元の若者が全員入った。その頃は農業が中心であり、家業を継ぐ長男は普通は勤めない。長男が青年団で、義太夫・人形遣い・舞台つくりを習得し、活躍していた。

中でも会田鶴由氏と関野政司氏は芝居に情熱を注ぎ、会田鶴由氏は歌舞伎の旅回りの一座に入っていたことがあった。長谷の座員はよくみんなで歌舞伎を観に行き、自分たちの舞台の参考にしていったという。山口朋彦氏によれば、昭和二十七年

(二九五二)～二十八年(二九五三)には県無形文化財指定にからめ、長谷青年団の人形総稽古があった。全員で『絵本太功記』尼ヶ崎の段『生写朝顔話』宿屋から大井川まで『御所桜堀川夜討』弁慶上使の段『奥州安達ヶ原 袖萩祭文の段』を稽古した。昭和三十年代半ばから長男たちも会社勤めをすることが多くなり、二十名いた青年団の団員も人形から離れていき、残ったのは山口朋彦氏と落合潔氏の二名となった。

また、昭和の中頃、山口寛造氏宅の建て替えがあった。それまで母屋に置いてあった人形用具を庭に保管庫を建てて移した。その折、茶箱半杯くらいの古いカシラが見つかったが、不用品として処分され、今はないという。

長谷座の三番叟は大変特徴がある。山口朋彦氏に三番叟について聞いてみた。戦前は白尉の面、黒尉の面を使って舞っていたという。筆者が昭和五十五年(一九八〇)頃、公演の休憩時間に、高橋貞雄氏から聞いて取った記録と、今回の朋彦氏からの聞き取りでは、米・酒・塩を置く位置、出の方向や回り方などが違っていた(高橋貞雄氏よりの採話は、林美禰子『班目人形芝居調査報告書』Ⅳ、三番叟・阿波鳴・箱根山のより良い伝承のために)平成十六年(二〇〇四)相模人形芝居足柄座、に詳しい)。共通だったのは、二人遣いであること、足の裏を見せるように遣えと言われたことの二点である。

〈昭和三十四年(一九五九)当時の座員〉
関野政司 会田鶴由 高橋貞雄 加藤正吉 石射重雄 山口寛造 神崎

正雄 高橋勇 山口朋彦 中村安造
会田アサ 落合潔

五 昭和後半期の長谷座

前述の通り、筆者は、昭和三十九年(一九六四)から昭和四十二年(一九六七)にかけて、青柳氏と共に長谷座の公演に足繁く通い、昭和四十一年(一九六六)八月八日から十五日までの八日間、会田鶴由宅に泊まり込んで、人形操作の研修を受けた。その折の取材ノートから記す。

○練習場所 会田鶴由宅 納屋
○練習時間 午後七時頃～九時頃
○人集めの方法 電話もしくは訪問して練習時間などを伝え、都合のつく者が集まる

○練習方法 公演の近い演目を練習する。この時は『一の谷嫩軍記 熊谷陣屋の段』だった。それぞれが得意とする役につく。立役・女形がほぼ決まっていた。上演の頻度の高い演目については、配役、特に主遣いは固定していた。義太夫に合わせて演じながら、主遣いが左・足の遣い手に言葉で指示をすることが多かった。通し稽古の後、筆者や青柳氏のために、足遣いや左遣いの基本、主遣いの基本の練習、主な振りの練習をしてくれた。

〈集まった人々とプロフィール〉
関野政司・農家。当時座長で人形操作の名手だったが、無口で指示を出すことは少なかった。

会田鶴由・敷地内に工場を持ち、近隣の女性たちをパートとして雇っていた。副座長だったが、実質的に座をとりし

きっていた。歌舞伎に詳しく、芝居がよくわかる人として重きを置かれていた。

会田アサ・鶴由氏の妻。髪結いや衣裳を担当。髪結いや衣裳については、林座の岩崎ツネ氏から習った。女形の足も遣った。

山口寛造 兼業農家。工務店に勤めていた。父・基次氏、祖父・要助氏も人形座員。特に要助氏は吉田朝右衛門に師事し、明治三十六年(一九〇三)頃、人形を山口鉄五郎氏らとともに購入したほどの人だ。寛造氏宅に人形の保存庫があり、公演時には、寛造氏宅から彼のトラックに人形用具を積んで行った。寛造氏は義太夫も習っていた。字も上手で、『本朝廿四孝 勤助住家の段』の襖の字なども書いた。

高橋貞雄・農家。皆から博士と呼ばれていた。芝居の内容についてよく説明してくれた。絵も上手で襖などに絵を描くのは、彼が中心となってやっていた。

立役遣い。
石射重雄・ぶどう農家。会田鶴由氏の左や足を遣うことが多い。女形遣い。

神崎正雄・戦前の若い頃、二年ほど文化財の仏像を修理する工房で働いていたに勤めていた。木でできた用具の修理も担当。まだ勤めていたので、いつも参加できるわけではない。

高橋勇・鳶の棟梁。普段はなかなか参加できない。古い家の立て替え時に捨てる浄瑠璃本を集めては、竹本土佐子氏などに受け取ってもらうようにしていた。

〈昭和四十一年(一九六六)当時の他の座員とプロフィール〉
高橋武雄・農家。大道具係として入座した。大道具製作だけでなく、左や足を手伝った。

山口朋彦・兼業農家。一番の若手。勤めがあるのでいつも参加できるわけではない。義太夫の活字本を入手して学ぶなど意欲的。

高橋保重・農家。
高橋武雄氏のいとこ。区長(地元の世話役)をした時に、長谷座の座員が少ないことに胸をいため入座。
筆者は大学卒業後は、頻繁に各座を訪ねることはできなかったが、相



会田鶴由氏宅にて(昭和41年8月)

な

模人形芝居大会だけは参加するよう努めた。

また、筆者は、昭和五十三年（一九七八）四月から前述のとおり六年間、厚木市長谷地区や隣接する愛名地区に住み、長谷座の活動に参加していた。

その頃は、夕方に電話連絡が入ると、三人の小さな子供を連れて、会田氏宅の練習に参加した。全員が揃うことはまれで、欠けている役を手伝うことが多かった。三年目くらいから主遣いを振られるようになった。台本を渡されることはなかったが、少しずつ台本を作って練習時に配るようになった。

昭和五十四年（一九七九）の秋に、若手の山口朋彦氏、入座したばかりの八谷美智子氏、特別参加の大野氏（女性）の四名で、会田氏の個別指導を受けることになった。『絵本太功記 尼ヶ崎の段（前半）』を取り上げ、いわゆる膝稽古——人形を持たずに振りを確認する練習をした。月二回の練習だったが、春になると八谷氏が抜け、大野氏や山口氏も徐々に仕事に忙しくなり顔を見せなくなった。半年続けて『尼崎の段（前半）』を終えたところまでこの稽古は終了した。

演目については、相模人形芝居は地元の義太夫連の稽古上げに呼ばれることが多かった。主権者側から演目を指定された。長谷座・林座・下中座の三人の座長は、口を揃えて「その演目はできない、などと決して言うてはならない」とよく言っていた。その中でも長谷座は他の座があまり上演しない演目に積極的に取り組んでいた。『基太平記白石噺 揚屋の段』『藪鷲恋

の枝道 小磯が原の段』『播州皿屋敷 青山鉄山館の段』『菅原伝授手習鑑 松王屋敷の段』『加賀見山田錦絵 又助住家の段』などである。会田鶴由氏の豊富な知識と経験で上演ができていたと思える。

しかし、時として役の解釈をめぐって、永田衛吉氏から苦言を呈されることもあった。例えば、『艶姿女舞衣 酒屋の段』で、会田氏は一人残ったお園が大福帳を取り出して見る振りをした。それに対し永田氏は、「お園は、自ら家を出て詫言を入れに戻った婚家で、舅姑に断りなく大福帳を見るような心根の女性ではない」と強い口調で指摘されたこともあった。

筆者は昭和五十九年（一九八四）四月に東京へ戻ることになったので、平日の昼間に定期的に練習している相模人形芝居を探さざるをえなくなった。そして、青柳氏の助言で梶立二宮高校相模人形部の練習に参



藪鷲恋の枝道 小磯が原の段 (写真提供 相模人形芝居連合会)



長谷人形座の碑 (撮影 筆者)

を受賞引続き昭和五十五年には重要無形民俗文化財として国の指定を受ける榮譽に浴したこれ皆この伝統技を今に伝えた先人の努力とこれに助力された当時の文化財担当者を始め文学博士永田衛吉氏小金喜一氏ら先輩諸氏の労苦の賜物にして茲にこれ等関係者の遺徳と功績を讃え碑に刻して永く後世に伝えるものである

昭和六十一年（一九八六）に堰神社の境内に長谷座の記念碑が建てられた。その碑に刻まれた文言と人名を記す。

●記念碑【表面】

長谷人形座の碑

国指定重要民俗無形文化財

厚木市長 足立原茂徳書

【裏面】

協賛 東京急行電鉄株式会社

東急建設株式会社

長谷座に貢献された先輩 故人の芳名

西川伊三郎 吉田朝右エ門 吉田東

九郎 西川伊左エ門 山口由太郎

杉山伴造 山口太郎左エ門 飯田市

造 城所源左エ門 山内作兵衛 会

田傳次郎 高橋良造 石射藤太郎

山内俊助 小金平造 山口要助 飯

田忠造 山口鉄五郎 石射弥助 石

射隆芳 武井正輔 山口基次 飯田

正治 関野政司 加藤正吉 中村安

造 天野古芳

建設委員

会田鶴由 山口寛造 石射重雄 高

橋保重 高橋貞雄 高橋武雄 神崎

正雄 山口朋彦 会田アサ 飯田一

郎 高橋勇 林美禰子 順不同

題字は文学博士 永田衛吉先生書

昭和六十一年九月十五日建之

は神奈川県並びに厚木市より県市文化賞

昭和六十一年九月十五日建之

伊勢原市日向一ノ三

(有) 秋山道造石材店刻

(原文のまま)

六 神崎正雄氏のカシラ修理と製作について

神崎正雄氏は、若いころ木を扱う仕事についていた経験から、カシラ・手・足などの修理を行っていた。勤めを辞めた昭和五十五年(一九八〇)頃から、本格的にカシラの修理を行うようになった。自宅の庭にプレハブの工房を建て、カシラのハギ塗り(塗りを全部剥ぎ取



神崎氏の修理したカシラ (写真提供 神崎正雄氏)

り、塗り直す)を行っていた。「八汐のカシラの塗りを剥ぎ取ったら、男のカシラだったので、元の男に戻した」と言っていたことから、全面的な塗りの修理であったことが伺える。昭和五十七年(一九八二)神崎氏撮影の修理後のカシラを掲載する。

昭和六十二年(一九八七)に、長嶺ヤス子氏がフラメンコで『安達原』を演ずるに当たり、長谷座に「ガブ」のカシラを貸してほしいとの要請があった。座には「ガブ」はなかったが、座長が勘違いして要請を受けてしまったので、急きよ

神崎氏が製作して貸し出した。その折、長嶺氏が深く感謝して、神崎氏をはじめ長谷座の人々を手厚く遇してくれた。長嶺氏の舞台は神崎氏に大きな力を与えてくれたという。

この後、神崎氏はますますカシラの製作と修理に力を注ぎ、二度の個展を開いた。個展で声をかけてきた観客に「大江巳之助さん達職人は図面を引いてカシラを作る。おじさんはインスピレーションでカシラを作る。おじさんは職人ではない、芸術家だ」と説明していた。平成五年(一九九三)一月に、入院中の会田

鶴由氏を見舞った時、話が神崎氏の人形製作に及んだ。会田氏は「マーちゃん(神崎氏の愛称)もカシラを作るのが、ずいぶん上手くなったよ」と言っていた。

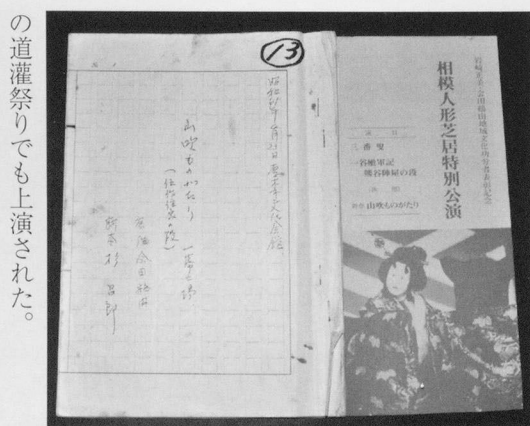
七 新作『山吹ものがたり』について

会田鶴由氏は多才な人であった。文章を書くことにも意欲的で、太田道灌を主人公にした新作人形浄瑠璃の上演もしくは小説の出版を考えていた。会田鶴由氏と林座の岩崎正美氏が昭和六十年(一九八五)十一月に地域文化功労者表彰を受けたことを記念して、厚木市文化会館小ホールで特別公演を行うことになった。昭和六十一年(一九八六)四月二十三日のことであった。

その折、会田氏が長年あたためていた太田道灌の物語を新作『山吹ものがたり』として上演することとなった。文化会館が積極的に関わり、会田氏の原案をもとに、脚本・演出を舞踊作家で青山子ども城音楽事業部顧問として活躍する杉昌郎氏に依頼した。作曲は厚木市出身で文楽三味線として活躍する鶴澤清友氏と同じく厚木市出身の琴の中丸春美氏が担当した。鶴澤氏と中丸氏は演奏も担当し、尺八の徳丸裕司氏も加わり、竹本土佐子氏をはじめ厚木市義太夫連盟総出演の華やかな舞台となった。

『山吹ものがたり』は、太田道灌と、彼に慕を所望され、山吹の歌を返した娘・八重(実は道灌に滅ぼされた豊島重員の忘れがたみの八重姫)との出逢いと別れを描いた作品である。

『山吹ものがたり』はその後、伊勢原



『山吹ものがたり』の台本と初演のプログラム

八 平成の長谷座

昭和五十九年(一九八四)から座員の高齢化と減少に心を痛めた会田座長が、自らの孫娘とその友人たちを養成し始めた。小学生だった孫娘の山口奈津子さんと、同じく小学生だが年上の三人の友人を座員に加え活動した。しかし、平成元年(一九八九)、三人の友人が中学を卒業してからは参加しなくなり、平成五年(一九九三)の会田氏死去の頃には山口奈津子さんも参加しなくなった。

翌平成六年(一九九四)十月に、厚木市教育委員会が、林座・長谷座の後継者を募集したところ、十人が応募。五人ずつのグループに分かれて、両座で月二回の練習に励んだ。翌年の九月には初舞台を踏み、長谷座に入座した。

(昭和五十九年(一九八四)から平成十二年(二〇〇〇)までに長谷座に関わった人々)

会田鶴由 石射重雄 神崎正雄 高

橋貞雄 高橋保重 山口寛造 高橋武雄 会田アサ 山口朋彦 高橋勇 飯田一郎 林美彌子 宇津木泰 山口奈津子 中村果織 後藤悦子 稲垣恵理 二瓶晴美 小林リエ子 大貫ミサオ 柏木喜美子 井上真弓 富田千春 富田温子 守屋至峰 平成五年(一九九三)三月、会田鶴由氏の死去に伴い、山口寛造氏が座長となった。平成十三年(二〇〇一)に山口氏が死去するまでは、旧座員と新入座員が共に活動を続けていた。ところが、山口氏死去の後、残っていた旧座員がすべて退座することになった。

そこで、長谷座は新座員の中でも一番若い富田温子氏を座長に選んだ。大学生の座長というのは前代未聞で、話題となった。富田氏は四年後の平成十七年(二〇〇五)春に大学卒業とともに退座してしまつた。

平成十三年(二〇〇一)に、林座座長・岩崎照夫氏と長谷座座長・山口寛造氏があいついで急逝した。二座ともに座員減少で危機的状况となり、厚木市は二座の後継者育成事業に本格的に乗り出した。それまでも幾度も行っていたのだが、平成十六年(二〇〇四)から「郷土芸能学校」の名で、厚木市内の郷土芸能の後継者を育成する講座を開始した。相模人形芝居については、林座・長谷座の座員が講師を務め、一年間で二十四回の講座を終了後、林座が長谷座に入座する仕組みである。平成二十四年(二〇一二)までに、市内外から六十九名が受講した(『広報あつぎ』平成二十四年(二〇一二)九



現在の座員 (写真提供 長谷座)

月一日号)。この受講生たちは、現在の長谷座にとつて大きな力となっている。また、平成十七年(二〇〇五)に富田座長が退座した時、新座長になったのは、平成十六年(二〇〇四)に後継者養成講座を受講した山口熱子氏であった。山口熱子氏は故・会田鶴由氏の長女であり、副座長となった井上真弓氏は三女である。

〔平成十三年(二〇〇一)から平成二十四年(二〇一二)までに長谷座に関わつた人々〕

小林リエ子 井上真弓 大貫ミサオ 二瓶晴美 富田千春 富田温子 高橋美和子 西澤一美 山口熱子 安宅ゆり子 藤原和代 関有子 吉田秀子 小林久一 山口朋彦 渡辺雄太 小林誠呉 佐々木透 早川幸秀 保坂節子 吉岡勝

現在は、旧座員の山口朋彦氏を顧問に

令和への改元騒動も落ち着いた六月十六日の日曜日、横浜野毛にある「横浜にぎわい座」で、およそ十年ぶりとなる「第二回かながわのお神楽公演」が開催された。「かながわのお神楽」は第一回が、平成二十二年一月に神奈川県民俗芸能保存協会創立四十周年を記念して、紅葉坂にある横浜能楽堂で開催されている。それから、およそ十年を経て、今回は、当協会創立五十周年記念と銘打って実施されたものだ。

前回、平成二十二年一月の公演は県内の全七団体、県内の五社中と氏子による保存団体二組が出演している。今回、県内の全団体は揃わなかったが、出演順に厚木市の相模流相模里神楽垣澤社中、鶴見区の土師流市場神代郷神楽萩原社中、港北区の港北神代神楽佐相社中、神奈川区の土師流子安神代神楽横越社中の四社中が参加した。

さて、当日は十年ぶりの公演ということもあってか、大勢の観客で溢れ、受付のあるフロアに上がるエレベーターは乗り切れないほどだった。気も焦るので階段を急ぐと、会場では、すでに入場受付に沢山の人

が並んでいる。また、ロビーには里神楽に因むグッズや、ポストカード、それに招きにも使われた「笑い文字」の作品を販売するコーナーも設けられ、実に賑やかだった。

十三時、開場のベルが鳴る。司会進行役の女性二人による案内と主催者の挨拶が行われ、一瞬会場が静まりかえると、いよいよ開幕だ。

まずは垣澤社中から、令和改元、陛下御即位、当協会五十周年を寿ぐように、「御祝儀三舞く寿式三番叟・寿獅子・大黒天」



寿式三番叟

会員だより

第二回かながわのお神楽公演を

見学して

松岡敬介

迎え、八王子の車人形座、古柳座の西川古柳氏を特別講師として、人形芝居の基礎を学んでいる。

〔現在の座員〕

山口熱子 井上真弓 二瓶晴美 小林リエ子 米山尚子 早川幸秀 保坂節子 吉岡勝 高橋美和子 鈴木好子 斎藤良江 藤原和代 中野雄太 阿川哲也 山口朋彦

の目度い演目から始まった。最後には三番叟、獅子、大黒が並び「天皇陛下御即位」と「当協会五十周年」を祝う幕が掲げら



紅葉狩 (萩原社中)



八雲神詠 (佐相社中)

れ会場は大きく盛り上がった。次は萩原社中の「紅葉狩」。謡曲のよ

うな幽玄なこの演目では、女形が更科姫と鬼女の面を素早く変える場面が見どころである。

続いて、佐相社中が「八雲神詠」を披露してくれた。おなじみ、八岐大蛇を退治するこの演目は、各地の神楽が演じて見せるだけに、それぞれの社中や保存団体の個性や特徴がよく理解できる。とくに八岐大蛇がどのような姿で登場するかが、楽しみでもある演目だ。

最後の舞台は横越社中の「天孫降臨と山神の舞」だ。神代神楽の見本のような内容の演目である。神代神楽に限らず、神事祭祀では親しまれている猿田毘古(猿田彦)が主役だ。登場から始まり、最後に舞を見せて舞台は終演する。



天孫降臨と山神の舞 (横越社中)

多くの人に広く知られている演目が上演された。神楽ファン(民俗芸能ファン)でなくとも親しみやすかつただろう。

このように、公演では多くの人を楽しませた里神楽だが、取り巻く環境は決して安泰ではない。会場で販売していたガイドブックにあるインタビュー記事や報告にも、様々な苦勞が語られている。直接、関係者の方にお伺いした際でも、現状の厳しさが話題となる。実際、祭祀に神楽の出演を依頼しなくなってしまう神社が増えているだけでなく、運営自体がままならなくなってしまう社中も有るようだ。

祭祀に対する意識の変化、祭事の簡略化、後継者難等々、こうした問題部分だけを見ると、長い歴史を持つ神楽の存在は、まるで風前の灯なのではないかとさえ思えてくる。

たしかに、戦後から高度成長期にかけて、神楽に限らず、広く民俗芸能にとつて厳しい時代だったと云えるし、その影響は近年まで続いていったと思う。

だが、人々の意識も変わってきている。だからこそ、この日は大入り満員になっただけではなく、スタッフとして大勢の若い人が参加したのだろう。ユネスコの文化遺産とまではゆかなくとも、優れた伝統文化として、もっと評価されて然るべきだと心から思う。

そして何よりも、県内でも多くの社中が消えていった中、令和の世に現存し、しっかりと活動しているのだ。状況は甘くないのだから、逆風ばかりではない。しっかりと生き残るはずである。

ところで、今回の公演は十年ぶりであった。当協会創立五十周年が絡んだわけだが、次は六十周年記念となると、また十年先となってしまう。しかし、せっかくなので人が親しんだ公演である。関係者の方々に、様々な御苦勞の多いことは十分承知しているつもりだが、せめて、数年に一度くらいは開催できないものだろうか。是非、御検討願いたい。

会員だより 小田原市小舟の白髭神社の奉射祭

学生会員
白井 正子

白髭神社の奉射祭は、「毘沙之的を射る式」を鎌倉時代初期の文治六年(一一九〇)一月七日に、中村忠直公の奉納したことが始まりとして、八百有余年続く神事とされる。

祭神は主祭神の猿田彦大神の他に七柱が祀られている。明治初めの神仏分離令で別当寺は廃止されて白髭大明神から白髭神社となった。

流鏑馬は走る馬上からの矢を射るのに対して徒で矢を射る作法は歩射と言い、神に奉納する神事の場合は「奉」の字を当て、「奉射」と称して祭事期は初春に行われる年占いの大切な神事とされる。白髭神社の奉射は、天下泰平と五穀豊稔を年占う神事を伝えて行われた。

的は手作りしたもの。竹は神社の竹林から採取して、竹籤は直径約二米(六尺

位)に編む。それに美濃紙又は石州紙の和紙を貼り、的の中心より渦巻状に十六周の太線が描かれている。的の上部に椿の枝から作った鳥形(つばめ)を三個吊るす。的は神楽殿の横並びに立て、東方から日が昇る頃に合わせて射手は弓をしばり、矢が放たれる。的に矢が当たる具合をみて年占いを行なう。

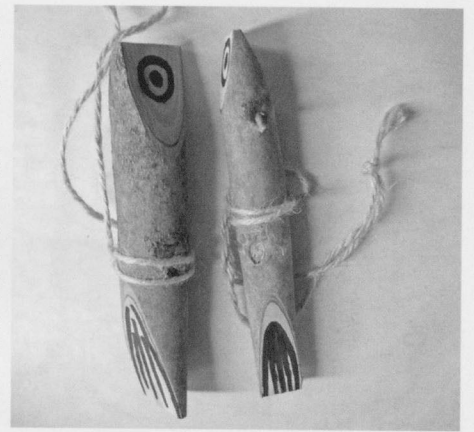
本年は的の中心近くに当たって、集まった人達の歓声(豊稔年)が揚がり、幸運の年を迎える。

射手は、神社再興当初からの禰宜であった小宮家の本家・分家の当主が世襲で務めている。

奉射の作法は、弓・矢・的・散米・鳥形等を拝殿の神前に供え、中村瑛宮司の祝詞の奏上があり、射手と供え物のお祓い後、境内に紅白の幕を張った射場には、射手の位置と的との中間に散米所を設け



奉射



鳥形

る。挙式には郷土史の榎本保美氏から奉射祭の説明があつて開始された。

射手は本家当主が先に矢を三本用意して位置に着き、第一の矢を弓に番える。分家の当主が的の前に散米する。散米を撒くと矢が放たれる。本家当主が三本、分家当主が三本、最後に本家当主がメの一本の矢を絞って放つ、計七本の矢の命中する有様から本年を占う。

最後の矢が放たれると待ち受けていた人達(本年は小学生とした)が的に向かって走り、的の鳥形を争奪する「的破」が行われた。

年始めに行われる奉射祭に多くの地元の人達が集まり、本年を迎えて神社に参詣する。

境内と地元山から伐採された、椿の枝で作られた小型の鳥形が用意されて戴いた。この鳥形を持ち帰り、戸口に吊るして置くと魔除けになり、幸運に恵まれると云われている。祭りは寒い時期でもあり、祭りを待つ間に温かい甘酒が用意されていた。

当会の民俗芸能情報提供から、本年頭の行事に白髭神社の奉射祭を見て出掛けたい。静寂な雰囲気の中に白髭神社は鎮座。

会員だより インド・ネパール仏教遺跡を めぐる

祖父川 精治

ヒマラヤ登山で幾度かネパールを訪れている。

インド国境に近い亜熱帯地域に、我が国でいえば縄文時代晩期、想像を遙かに超える二千五百年前にお釈迦さまが誕生したと伝えられる「ルンビニー」という土地があること知った。首都のカトマンズから往復できそうだが、仏教遺跡巡り一ヶ所だけでは勿体ない。誕生から入滅まで縁りの土地である、八大仏教遺跡全てを巡り歩きたいという想いが強く募るようになる。予定では鉄道とバス利用で全行程約二週間。

古代インドを統一したアシヨカ王が仏教遺跡を巡り歩き、各地に記念の石柱を残している。この石柱の頭部四頭の獅子像は、インドの国旗や紙幣に使われている。紀元前三世紀古代インドまた五世紀前後、仏教遺跡から出土している墓石などに刻まれたお釈迦さま八十年の生涯を見ると主要八カ所に区分し選ぶことができる。

一、誕生の地、ルンビニー(ネパール)
二、菩提樹の下で禪定を修し成道の地、ブツダ・ガヤ

三、起居説法した霊鷲山教団の地、ラージギル
「インドでは珍しい温泉がある」

地元の人達に見守られ、敬愛される古社に継承された奉射祭に愛着を感じるのには、地元にも民俗の歴史が潜む重層性だろうか。

四、初めて法を説いた仏教始まりの初転法輪の地、サルナート

五、最古最大の仏教大学址、ナーランダ

六、生後七日目に死別した母マヤー夫人に無上の法を説いた、サーンカーシャ

七、祇園精舎と舎衛城のサヘート、マヘート

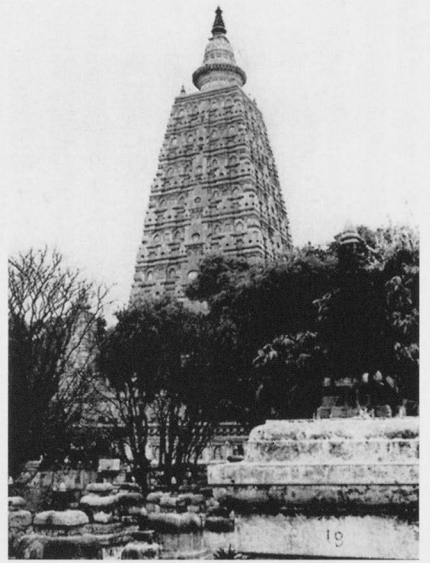
八、旅の途中、八十歳で沙羅双樹の下で入滅、荼毘に付したクシーナガル

以上を幾つか説があるようだが、八大仏教遺跡と呼んでいる。

成田空港から、インドの首都デリーまで搭乗約九時間。インド領内に入って、エア・インディア機長から右側の窓より世界最高峰のエベレストが遠望できますとアナウンスがある。

一泊し、デリー市内見物の後、十六時三十分発のカルカタ行き急行寝台列車は、始発というのに三時間も遅延。ここは、インドだなどと我慢する。車中では、祈祷、高軒、放屁、赤子のむずかる泣き声、弁当売りとホテル泊では味わえない貴重な体験をする。

翌十一時三十分ガヤ駅着。バス三十分で「仏教遺跡二番目」のブツダ・ガヤへ。有名なマハーボーディー寺院大塔横の、生い茂る巨大な菩提樹の下にお釈迦さま



マハーボディー寺院大塔

天井、温泉の噴き出し口は石造彫刻の象や獅子である。男女共に着衣のまま入浴している。お釈迦さまや中国から来訪した玄奘三蔵法師も湯あみしたと伝えられる。

ブツダ・ガヤーからヒンズー教の最大の聖地、ヒマラヤからの水を集めたガンジス河畔の都市であるバナールス「人口百二十万」へ。バス八時間。

が禅定したという金剛法座がある。スリランカやミャンマーから来たという白衣の大勢の仏教徒たちが揃って拝礼をしている。ブツダ・ガヤーで二泊し、いよいよ仏教集団の地ラージギル、最大級の仏教大学址のナーランダを往復する。バス十時間。

標高五百メートルの岩山の霊鷲山、現地名グリッドラクータ山。頂上近くに驚の姿をした岩場があることからその名があり、登山道も整備されて二時間で往復できる。周囲ぐるりと、お釈迦さまも眺めたであろう城壁跡が残っている。

その山の外れの一角に、インドでは実に珍しいラージギル温泉がある。ほんとは温泉という文字は無く、ガランパニ熱い水」と呼んでいる。ヒンズー教寺院境内にある、付属の温泉精舎である。通りには女性用に、赤青紫の色粉を売る屋台が並んでいる。湯あがりの、頭の髪分け目に付けるシンドールである。これは、夫が健在の既婚の女性だけに許された風習である。

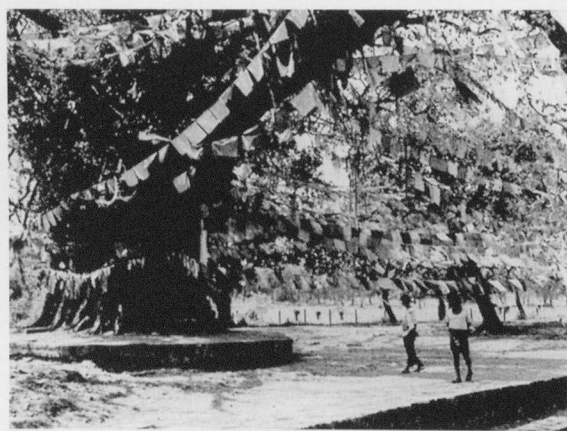
がっちりとした石組みの吹き抜けの青

早朝に出かけると、ガートと呼ばれる河岸では沐浴する人たちが大混雑、色鮮やかなサリーを着用した女性達が目立つ。そして少し離れた所では故人を荼毘に付すといった光景が見られる。近くには、焼却燃料とするマキがうす高く積んである。ヒンズー教の信仰によれば、ガンジス河の聖なる水で沐浴すれば全ての罪穢れは清められるという。当地で二泊して、サールナートを往復する。バス二時間。

伝道の旅に出て、僅か五人の修行僧へ始めての説法を行った地である。仏教はここに始まったのである。

バナールスからバス七時間、入滅の地クシーナガルを経て更に二時間、ゴークラプールへ泊る。

初転法輪から四十五年、仏教伝道の旅を続けたお釈迦さまは身体の衰えを感じ故郷を目指して最後の旅を続けた。その途中、病を得てクシーナガルに着くと沙羅双樹の下へ弱った身を横たえ入滅の時を迎えた。享年八十歳。死後、火葬に付され仏舎利八個に分けられた。近くの大般若寺には大きな涅槃像が納められてい



巨大な菩提樹 樹齢2000年余

る。

待望のネパール入国では、通関手続きに一時間余も待たされる。釈迦時代と変わらない、遙か無限に広がる真夏のような田園地帯。特に国境線を引いた区分は無く、両国で住み暮らすネパール、インド人は出入国は自由のようである。

バス一時間で、待望のお釈迦さま誕生の地ルンビニー。我が国では天然記念物指定確実の巨木である、色鮮やかな経文旗に彩られ霊気籠る菩提樹の下に、笑みを浮かべた赤子の石仏が安置されている。世界遺産指定。旅の途中、母のマールヤ夫人がこの花房に手を伸ばした時に誕生したと伝えられる。東京国立博物館の法隆寺宝物館には、この時の様子を形造った金銅仏が展示されている。

しかし生後七日後には、母マールヤ夫人を亡くしてしまう。シャカ族の王子に生まれたお釈迦さまは、十六歳で結婚し男

児をもうける。しだいに生老病死について深く思い悩むようになり、全てを捨てて王城を出て修業の道に入る。

単独自転車旅行中の赤黒く日焼けしたイタリヤ人と出会う。十四ヶ月後には最終目的の日本へ到着予定と話す。

この日はバス十一時間で、バルランプールへ泊り、サハート・マハートへ。お釈迦さまは雨期を過ぎたとい、マハートは有名な祇園精舎の跡。平家物語に記された有名な一文、「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響き有り」。鐘楼があり思いつき鐘を大きく突き鳴らす。ウツタルプラデッシュ州都、ラックノウへ。バス八時間。

深夜の急行寝台列車、七時間でアールグラーへ。インド最高最大の観光地、世界遺産指定の白亜の霊廟タージマハールを見物して、デリーへ戻る。バス六時間。

令和元年度事業報告

I 事業の実施等

1 普及事業

(1) 表彰（総会時）

- ア 令和元年度表彰の実施 二十人
- イ 令和元年度表彰のための準備

(2) 研修会の開催（総会時）

- ア 鹿島踊りのビデオ鑑賞

(3) 民俗芸能大会等の共催

- ア 第二回かながわのお神楽（神奈川県民俗芸能保存協会創立五十周年記念）

- ・ 期日 令和元年六月十六日（日）
- ・ 場所 横浜にぎわい座芸能ホール
- ・ 主催 第二回かながわのお神楽公演

実行委員会、江戸里神楽公
演学生実行委員会

イ 第四十三回 相模ささら踊り大会

(神奈川県民俗芸能保存協会創立
五十周年記念)

・期日 令和元年七月二十四日(水)

・場所 秦野市総合体育館メイシア
ナ

・主催 相模ささら踊連合会、秦野市、
秦野市教育委員会

ウ 第四十七回相模人形芝居大会(神
奈川県民俗芸能保存協会創立五十
周年記念)

・期日 令和二年二月十一日(火・祝)

・場所 神奈川県立青少年センター

・主催 相模人形芝居連合会、神奈川
県

(4) 民俗芸能大会等の後援

ア 第四十五回「あつぎひがし座」人
形浄瑠璃自主公演

・期日 令和元年六月九日(日)

・場所 厚木市文化会館小ホール

・主催 あつぎひがし座

イ 相模粹鼓會結成三十周年記念「粹
鼓會とお囃子の集い」

・期日 令和元年十月二十七日(日)

・場所 杜のホールはしもと

・主催 祭り囃子愛好の会、
ウ 第十七回厚木市郷土芸能まつり

(ア) 郷土芸能発表会

・期日 令和元年十月二十七日(日)

・場所 厚木市文化会館小ホール

・主催 厚木市教育委員会

(イ) 相模人形芝居特別公演

・期日 令和元年十一月十日(日)

・後援 神奈川県教育委員会

・場所 厚木市文化会館小ホール

・主催 厚木市教育委員会

エ 令和元年度小田原民俗芸能保存協
会後継者育成発表会

・期日 令和元年十一月十日(日)

・場所 小田原市民会館大ホール

・主催 小田原民俗芸能保存協会

2 機関誌の刊行

機関誌『かながわの民俗芸能』

第八十四号(五十周年記念誌)の刊行

3 啓発事業

(1) 民俗芸能情報の提供(三ヶ月毎に年四
回発行)

・令和元年七月～九月号 六月発行

・令和元年十月～十二月号 九月発行

・令和二年一月～三月号 十二月発行

・令和二年四月～六月号 三月発行

(新型コロナウイルスの影響による
印刷施設使用不可のため休刊)

(2) 二〇一九きらめくふるさとかながわ民
俗芸能祭の開催(神奈川県民俗芸能保
存協会設立五十周年記念、きらめくふ
るさとかながわ民俗芸能祭十回記念)

・期日 令和元年十二月一日(日)

・場所 はまぎんホール ヴィアマール

・出演 仙石原神楽保存会(箱根町)

吉浜鹿島踊保存会(湯河原町)

ちやつきらこ保存会(三浦市)

相模人形芝居林座(厚木市)

浦賀虎踊り保存会(横須賀市)

足柄ささら踊保存会(南足柄市)

・主催 神奈川県民俗芸能保存協会

・共催 神奈川県、(公財)はまぎん
産業文化振興財団

・後援 神奈川県教育委員会

横須賀市教育委員会
三浦市教育委員会
厚木市教育委員会

南足柄市教育委員会

箱根町教育委員会

湯河原町教育委員会

・協賛 横浜銀行

Ⅱ 会議の開催

1 総会

・期日 令和元年六月九日(日)

・場所 神奈川県立地球市民かながわ
プラザ(あーすぷらざ)

2 理事・事務局会議

第一回

・期日 令和元年五月二十六日(日)

・場所 アミューあつぎ(厚木市)

第二回(新型コロナウイルスにて中止)

・期日 令和二年三月二十七日(金)

・場所 アミューあつぎ(厚木市)

令和二年度事業予定

I 事業の実施等

1 普及事業

(1) 表彰 令和二年度表彰の実施

(2) 民俗芸能大会等の共催・後援

2 機関誌の刊行

機関誌『かながわの民俗芸能』
第八十五号の刊行

3 啓発事業

(1) 民俗芸能情報の提供(三ヶ月毎に年四
回発行)

・令和二年七月～九月号 六月発行

・令和二年十月～十二月号 九月発行

・令和三年一月～三月号 十二月発行

・令和三年四月～六月号 三月発行

(2) 二〇二〇きらめくふるさとかながわ
民俗芸能祭の開催

・期日 令和二年十二月六日(日)

・場所 はまぎんホール ヴィアマール

Ⅱ 会議の開催

1 総会

・期日 令和二年六月七日(日)

・場所 神奈川県立地球市民かながわ
プラザ(あーすぷらざ)

2 理事・事務局会議 随時開催

賛助会員ご紹介(順不同敬称略)

鶴見神社 横浜市鶴見区

金子 元重 横浜市鶴見区

簡 照子 横浜市鶴見区

事務局ボランティアスタッフ募集

神奈川県民俗芸能保存協会では、事務
局の業務をお手伝いして下さる方を募
集しています。

○県内各地の民俗芸能情報の収集
○会員向け情報の印刷・発送作業

いずれかのお手伝いをして下さる方
は、二十八ページに記載してある協会事
務局のメールアドレスまでご連絡くださ
い。

【資料一】

神奈川県民俗芸能保存協会年表
(平成十二年度(二〇〇〇年度)

〔令和元年度(二〇一九年度)〕

平成十二年度(二〇〇〇年度)

七月十九日平成十二年度理事会・総会。相模里神楽垣澤社中高校生の公演見学会(於厚木市文化会館)。十月二十二日第二十一回相模原市民俗芸能大会見学会(於相模原市立あじさい会館ホール)。十一月三日民家園まつり民俗芸能舞台公演見学会(於川崎市立日本民家園)。十一月二十五日第五十回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。一月二十八日第二十八回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見学会(於平塚市中央公民館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第六十五号発行。

平成十三年度(二〇〇一年度)

六月二十四日平成十三年度理事会・総会。記録映像「世附の百万遍念仏」の鑑賞会(於県立歴史博物館)。十一月三日第三回かながわ民俗芸能のつどい「鉛屋踊り特集」の公演見学会(於川崎市立日本民家園)。十一月二十四日第五十一回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。二月十七日第二十九回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見学会(於平塚市中央公民館)。記録映像作品制作(九作品)「相模原形芝居(林座、長谷座、下中座、前鳥座、足柄座)」「大山阿夫利神社の倭舞・巫女舞及び引目神事ほか儀礼習俗」「チャッキラコ」「三増の獅子舞」「神奈川の民謡(川崎稲毛地区の座敷唄、鎌倉木遣り、鎌倉大船の焼米搗き唄、小田原栢山の田植え歌及び箱根馬子唄・長持唄)」「神奈川の鹿島踊り(寺山神社の

鹿島踊り、吉浜の鹿島踊り、貴船神社の船祭りの中の鹿島踊り)」、「箱根の湯立獅子舞(仙石原、宮城野)」、「神奈川の神楽(①湯花神楽(鶴岡八幡宮、瀬戸神社、白旗神社)、②鶴岡八幡宮の日と長の舞、八乙女の舞、③禰宜舞(白旗神社大神)、④相模里神楽(垣澤社中))」、「菊名の鉛屋踊り」、神奈川県民謡緊急レポートの補修及びデジタル保存・神奈川県指定及び選択無形民俗文化財16mmフィルム記録映像作品二十三巻のデジタル化、三月三十一日「かながわの民俗芸能」第六十六号発行。

平成十四年度(二〇〇二年度)

六月二十三日平成十四年度理事会・総会。平成十二、十三年度協会事業の後継者育成映像の鑑賞会(於県立歴史博物館)。十一月三日室生神社の流鏑馬の見学会(於山北町室生神社)。十一月十日第四回かながわ民俗芸能のつどい「川崎の雛子の公演見学会(於川崎市立日本民家園)。十一月二十三日第五十二回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。三月十六日第三十回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見学会(於厚木市文化会館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第六十七号発行。

平成十五年度(二〇〇三年度)

五月二十五日平成十五年度理事会・総会。平成十二、十三年度協会事業の後継者育成映像の鑑賞会(於県立歴史博物館)。七月二十四日相模ささら踊り大会・ささら踊り体験教室の見学会(於秦野市総合体育館)。八月二十四日第三十一回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見学会(於厚木市文化会館)。十一月三日室生神社の流鏑馬の見学会(於山北

町室生神社)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第六十八号発行。

平成十六年度(二〇〇四年度)

六月二十七日平成十六年度理事会・総会。平成十二、十三年度協会事業の後継者育成映像の鑑賞会(於県立歴史博物館)。七月二十九日相模ささら踊り大会・ささら踊り写真パネル等展示の見学会(於海老名運動公園総合体育館)。一月十五日チャッキラコの見学会(於三浦市・三崎海南神社)。二月十二日第三十二回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見学会(於南足柄市文化会館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第六十九号発行。

平成十七年度(二〇〇五年度)

六月二十六日平成十七年度理事会・総会。「内山剣舞おどり」の鑑賞会(於県立歴史博物館)。十月二十三日第四十七回関東ブロック民俗芸能大会の見学会(於県立青少年センター)。十一月二十六日第五十五回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。二月十八日第三十三回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見学会(於南足柄市文化会館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十号発行。

平成十八年度(二〇〇六年度)

六月二十五日平成十八年度理事会・総会。「小田原雛子(小田原雛子多古保存会)」の鑑賞(於県立歴史博物館)。九月二十三日遊行寺踊念仏の見学会(於遊行寺大書院本堂)。十一月二十五日第五十六回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。二月十八日第三十四回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見

学会(於厚木市文化会館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十一号発行。

平成十九年度(二〇〇七年度)

七月八日平成十八年度理事会・総会。協会表彰規約制定。「三崎甚句踊り」等(三浦市民謡協会)の鑑賞(於県立歴史博物館)。十月十四日山北のお峯入りの見学会(於山北町役場駐車場・山北町高杉神明社境内)。十一月二十四日第五十七回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。一月十七日第三十五回相模原形芝居大会・相模原形芝居教室の見学会(於県立青少年センター)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十二号発行。

平成二十年度(二〇〇八年度)

六月二十二日平成二十年度理事会・総会・協会表彰式(二十名の功労者表彰)。記録映像「阿波木偶箱廻し」の鑑賞(於かながわ県民センター)。十一月二十七日理事会(於かながわ県民センター)。三月十六日表彰審査会(於かながわ県民センター)。第十回全国こども民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。十月五日秋川歌舞伎あきる野座公演の見学会(於あきる野市秋川キラホール)。十一月二十二日第五十八回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十三号発行。

平成二十一年度(二〇〇九年度)

七月二十六日平成二十一年度理事会・総会・協会表彰式(十六名の功労者表彰)。記録映像「チャッキラコ」の鑑賞(於県立歴史博物館)。理事会(十月三十日、三月十九日・於かながわ県民センター)。表彰審査会(三月十九日・於かながわ県

民センター)。十一月二十一日 第五十九

回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。三月十四日 相模人形芝居普及巡回公演の見学会(於川崎市民プラザ)。十二月十三日 協会創立四十周年記念事業・かながわ民俗芸能大会(於県立青少年センター)。一月二十四日 協会創立四十周年記念事業・かながわのお神楽(於横浜能楽堂)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十四号発行。

平成二十二年度(二〇一〇年度)

七月十八日 平成二十二年度理事会・総会・事務局会議・協会表彰式(二十三名の功労者表彰)(於かながわ県民センター)。十二月十二日 きらめくふるさと二〇一〇かながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィアマール)。理事(六月六日、七月四日、九月二十六日、一月二十三日・於かながわ県民センター)。八月二十日 事務局会議(かながわ県民センター)。二月十三日 第三十八回相模人形芝居大会の見学会(於平塚市民センターホール)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十五号発行。

平成二十三年度(二〇一一年度)

六月十二日 平成二十三年度理事会・総会・協会表彰式(二十一名の功労者表彰)(於県立歴史博物館)。十二月四日 きらめくふるさと二〇一一かながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィアマール)。理事会(四月十七日、五月二十九日)(於かながわ県民センター)。理事(三月十七日・於ういろ小田原駅前店)。七月十八日 初木神社鹿島踊りの見学会(於熱海市初島)。九月十八日 白幡八幡神社禰宜舞の見学会(於川崎市宮前区平)。三月三十一日「かながわの民俗芸

能」第七十六号発行。

平成二十四年度(二〇一二年度)

五月二十七日 平成二十四年度理事会・総会・協会表彰式(十三名の功労者表彰)・民俗芸能に対する助成金等の活用事例等の発表会(於県立地球市民かながわプラザ)。十二月二日 きらめくふるさと二〇一二かながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィアマール)。四月二十九日 五所八幡宮例大祭の見学会(於中井町五所八幡宮)。六月八日 品川神社太々神楽の見学会(於品川区品川神社)。十一月二十四日 第六十一回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十七号発行。

平成二十五年(二〇一三年度)

六月二日 平成二十五年総会・協会表彰式(十六名の功労者表彰)・後継者育成に関する事例発表会(於県立地球市民かながわプラザ)。十二月一日 きらめくふるさと二〇一三かながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィアマール)。八月十七日 鶴沼皇大神宮例大祭の見学会(於藤沢市鶴沼皇大神宮)。十一月二十三日 第六十二回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十八号発行。

平成二十六年(二〇一四年度)

六月一日 平成二十六年総会・協会表彰式(二十一名の功労者表彰)・後継者育成に関する事例発表会(於県立地球市民かながわプラザ)。十二月七日 きらめくふるさと二〇一四かながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィア

マール)。理事・事務局会議(五月十八日、七月二十日、三月一日・於アミューあつぎ)。神奈川県議団との意見交換会(六月一日・於県立地球市民かながわプラザ)。神奈川県教育委員会文化遺産課、県文化課との意見交換会(八月十八日・於県教育委員会、十月二十六日・於県教育委員会、十一月二十九日・於アミューあつぎ)。四月十二日 三之宮比々多神社の人形山車運行の見学会(於伊勢原市三之宮比々多神社)。十一月二十二日 第六十三回全国民俗芸能大会の見学会(於日本青年館)。一月二十日 神田明神太々神楽の見学会(於千代田区神田明神)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第七十九号発行。

平成二十七年(二〇一五年度)

六月六日 平成二十七年総会・協会表彰式(十五名の功労者表彰)・郷土芸能団体に対する補助金等についての研修会(於県立地球市民かながわプラザ)。十二月六日 二〇一五きらめくふるさとかながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィアマール)。理事・事務局会議(五月十七日、九月二十六日、三月六日・於アミューあつぎ)。神奈川県教育委員会文化遺産課、県文化課との意見交換会(五月十七日、三月六日・於アミューあつぎ)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第八十号発行。

平成二十八年(二〇一六年度)

六月五日 平成二十八年総会・協会表彰式(十五名の功労者表彰)・記録映像「山北のお峯入り」の鑑賞会(於県立地球市民かながわプラザ)。十二月四日 二〇一六きらめくふるさとかながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホール

ヴィアマール)。理事・事務局会議(五月十五日、七月三十日、三月四日・於アミューあつぎ)。神奈川県教育委員会文化遺産課との意見交換会(八月十八日、十二月十六日・於アミューあつぎ)。神奈川県議会对する請願の提出(十月十四日採択決議)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第八十一号発行。

平成二十九年(二〇一七年度)

六月四日 平成二十九年総会・協会表彰式(十六名の功労者表彰)・記録映像「これさま」の鑑賞会(於県立地球市民かながわプラザ)。十二月三日 二〇一七きらめくふるさとかながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィアマール)。理事・事務局会議(五月二十日、十一月二十五日、三月十七日・於アミューあつぎ)。神奈川県教育委員会文化遺産課との意見交換会(十一月二十五日・アミューあつぎ)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第八十二号発行。

平成三十年(二〇一八年度)

六月三日 平成三十年総会・協会表彰式(十一名の功労者表彰)・文化財保護法の改正と神奈川県民俗芸能記録保存調査実施方針についての研修会(於県立地球市民かながわプラザ)。十二月二日 二〇一八きらめくふるさとかながわ民俗芸能祭の開催(於まぎんホールヴィアマール)。理事・事務局会議(五月六日、十一月二十五日、三月十六日・於アミューあつぎ)。三月三十一日「かながわの民俗芸能」第八十三号発行。

令和元年度(二〇一九年度)

六月九日 令和元年度総会・協会表彰式(二十名の功労者表彰)・記録映像「鹿島

踊り」の鑑賞会（於県立地球市民かながわプラザ）。十二月一日（二〇一九）からめぐふるさとかながわ民俗芸能祭の開催（神奈川県民俗芸能保存協会設立五十年記念、きらめくふるさとかながわ民俗芸能祭十回記念（於はまぎんホールヴィアマール）。理事・事務局会議（五月二十六日、三月二十七日（新型コロナウイルスにて中止）於アミューあつぎ）。「かながわの民俗芸能」第八十四号（五十年特集号）発行。

【資料二】

神奈川県民俗芸能保存協会機関誌総目次

（平成十一年度（一九九九年）第64号）
（平成三十年（二〇一八年）第83号）

平成十一年度（一九九九年）第64号
（神奈川県民俗芸能保存協会創立三十周年記念特集）

民俗芸能の現状 後藤 淑
貴重な民俗芸能を後世へ

民俗芸能が結ぶ学校と地域 岡崎 洋
神奈川県教育委員会教育長 小森良治

創立三十周年に寄せて―偉大なる永田衛吉 河竹登志夫
民俗芸能の普及伝承への大きな貢献 星野 紘

民俗芸能の普及伝承への大きな貢献 星野 紘

協会から
伝承回生の転機 素鷲神社鹿島踊保存会
協会創立三十周年に寄せて

富田志津江
ささらにあつわる話 岡部眞智子

会員紹介運動を 日達晴子

協会の昨日、今日、明日 徳山泰子

協会の三十年を振り返って 天野 益

協会の三十年を振り返って 荒井俊明
報告

第一回かながわ民俗芸能のつどい・第二十三回秦野市民俗芸能大会 石井一躬
かながわ民俗芸能フェスティバル 事務局
民俗芸能散歩（4）愛川町①

三増の獅子舞について 山口研一
新会員紹介

神奈川県立愛川高等学校「伝統文化」を授業に取り入れて 相原芳夫
平成10年度後継者育成事業報告

事務局
神奈川県民俗芸能保存協会年表（昭和44年7月～平成12年3月）

「かながわの民俗芸能」総目次（1～63号）
ニュース・伝言板
会員活動紹介

平成十二年度（二〇〇〇年度）第65号
（二〇〇一年「希望の年」記念事業）

「みんぞく芸能祭inかながわ」
みんぞく芸能祭inかながわ実行委員会

平成12年度新・神奈川県指定無形民俗文化財について 城所恵子
かながわ民俗芸能のつどい

平成12年度報告と13年度予定 事務局
特別寄稿

相模人形芝居かしらの特徴と価値 大谷津早苗
会員だより

新しい世紀に相応しい民俗芸能
心ふるさとを訪ねて 中坪功雄
民俗行事・生麦「蛇も蚊も」との出会い 内田長志

根府川の福踊り 長野ふさ子
さがみの大風まつり 祖父川精治

沖縄芸能と川崎沖縄芸能研究会の沿革

川崎沖縄芸能研究会
「海老名音頭」との出会い 岡部眞智子
南足柄の民俗芸能 菊地晃三
一般寄稿

西相模山北の洒水の滝祭り 古瀬考一
川村岸囃子保存会囃子連の活動 沼田道雄

新会員紹介
権太坂横笛会 菊池四郎
横浜ごぜ唄保存会 室野定子

ニュース・伝言板
協会事業報告
会員活動紹介

平成十三年（二〇〇一年）第66号
巻頭言
見落としていること

神奈川県民俗芸能保存協会会長
「みんぞく芸能祭inかながわ」開催される 後藤 淑
事務局

「みんぞく芸能祭inかながわ」西さがみ大会について 西さがみ
みんぞく芸能祭inかながわ西さがみ大会事務局

民俗芸能散歩（5）
人形浄瑠璃芝居とひらつか 平塚市
寄稿

相模原郷土懇話会 平成十二年度会員
共同調査「相模原の盆踊り」
相模原郷土懇話会

会員だより
三浦半島芦名・淡島神社祭り今昔 永田泰祐
諏訪神社明神獅子舞の変遷 中里泰紀

アリス・メイカー 徳山泰子
新団体会員紹介

牛込獅子舞保存会 会長 吉村正幸
ニュース・伝言板

協会事業報告・お知らせ
平成十四年度（二〇〇二年度）第67号
巻頭言

民俗芸能の保存に思う
神奈川県民俗芸能保存協会会長 後藤 淑

山北のお峯入り―六年ぶりの開催を終えて―
お峯入り保存会長 岩本喜明

「民俗芸能散歩（6）川崎市①」
川崎市民俗芸能発表会 竹下 研
真鶴・貴船・船まつり！ 小野間松男
特集

次代へ伝える―民俗芸能の伝承と活用
後継者育成について思うこと 石井一躬
民俗芸能の映像記録作成事業に当たって 城所恵子

見学会参加記 徳山泰子
流鏝馬幻想 第五十二回全国民俗芸能大会に参加して 萩野新一

私に属する「小袋谷囃子会」の活動 内田直生
菅獅子舞への関心と理解を深めるために 佐保田五郎

おんべの思い出 永田泰祐
民俗芸能を志す学生の為に 中坪功雄
第17回国民文化祭とつとり2002出演に思う 垣澤 勉

写真投稿
川崎沖縄芸能大会 新井義弘
ニュース・伝言板

平成十五年（二〇〇三年度）第68号
巻頭言
民俗芸能の採集に思う

神奈川県民俗芸能保存協会会長

後藤 淑

「民俗芸能散歩(7)秦野市①」

丸橋弥生

秦野ささら踊り

神奈川県民俗芸能緊急調査について

石井一躬

神奈川県民俗芸能調査に参加して

本多秀雄

民俗芸能に伝わる心と思う

中川匡子

会員だより

民俗芸能祭二〇〇三

ダイヤモンド

権現山も百八松明

綾竹の音色・少女達のチャッキラコ

後継者育成指導を志して

忙しかった正月行事

第45回関東ブロック民俗芸能の大会の出演に思う

ニュース・伝言板

協会事業報告・お知らせ

二人三脚

平成十六年度(二〇〇四年度) 第69号

巻頭言

神奈川県民俗芸能保存協会会長

後藤 淑

「民俗芸能散歩(8)相模原市①」

長徳寺盆踊り

木村弘樹

特集

『高校生民俗芸能クラブ交流座談会』

宇田川信

神奈川県民俗芸能緊急調査について

地芝居と太神楽―民俗芸能を支え、伝える人たちのこと―

大野一郎

神奈川県民俗芸能緊急調査に参加して

―囃子獅子舞の門付け― 加藤隆志

見学会参加記

第1回見学会「相模ささら踊り大会」に参加して

越川康晴

子どもたちがみてる―チャッキラコ賛歌―

徳山泰子

会員だより

聞き書き「浦賀の虎踊」のこと

松岡敬介

真鶴の貴船(きぶね)まつり 祖父川精治

第33回全日本文化集会全国大会に参加して

鈴木宏江

第25回全国豊かな海づくり大会(プレ大会)に参加して

小林利彦

ニュース・伝言板

協会事業報告会員活動紹介・お知らせ

平成十七年度(二〇〇五年度) 第70号

ごあいさつ

神奈川県の民俗芸能と今後―新顧問就任の挨拶にかえて―

神奈川県民俗芸能保存協会顧問

後藤 淑

会長就任に当たって

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

「民俗芸能散歩(9)二宮町①」

加藤節子

特集

『民俗芸能団体交流座談会』

事務局

『第47回関東ブロック民俗芸能大会』

事務局

『足柄上地区郷土芸能団体等ネットワーク』について

事務局

平成17年度新規団体会員紹介

前鳥神社囃子太鼓保存会

八若はやし連

海南神社面神楽保存神楽師会

平塚市豊田神楽保存会

見学会参加記

第五十五回全国民俗芸能大会

中村理行

大島の獅子舞小考

松岡敬介

母の故郷の「行合祭り」の追憶

永田泰祐

西馬音内盆踊り

祖父川精治

月と国語

徳山泰子

新しい伝統づくりをめざした―小田原市橋中学校相模人形クラブの活動―

相模人形芝居下中座

副座長

林美禰子

丸の内雑感

無形遺産のこと

樋口和宏

ニュース・伝言板

協会事業報告会員活動紹介・お知らせ

平成十八年度(二〇〇六年度) 第71号

巻頭言

「民俗芸能雑感」

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

民俗芸能散歩(10)小田原市①

早川浩美

特集

『民俗芸能団体交流座談会(横須賀・三浦)』報告

事務局

『愛川高校「伝統文化」受講生の北京公演』

神奈川県立愛川高校校長

廣田克己

関係者インタビュー

平成18年度新規団体会員紹介

新城郷土芸能囃子・曲持保存会

横浜お囃子会

見学会参加記

遊行寺 踊念仏

第五十六回全国民俗芸能大会

南から

会員だより

太鼓

ニュース・伝言板

協会事業報告・会員活動紹介・お知らせ

平成十九年度(二〇〇七年度) 第72号

巻頭言

「記録のもつありがたさ」

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

民俗芸能散歩(11)横須賀市①

佐藤明生

特集

『民俗芸能団体交流座談会(相模原)』

報告

『民俗芸能の公開』

「韓国・安東国際仮面舞フェスティバル2007への出演」

相模里神楽垣澤社中

代表

垣澤 勉

「北京公演を終えて」

相模人形芝居下中座

副座長

林美禰子

「第二十二回 国民文化祭に参加して」

相模人形芝居長谷座々々長

山口熟子

「民俗芸能の公開と継承」

成城大学文学部教授

特別会員

田中宣一

平成19年度新規団体会員紹介

白妙囃子連

代表

村田秀雄

安房の人形浄瑠璃復活をめざす会(千葉県安房地方)

事務局

安田隆一

見学会参加記

お峯入り見学会に参加して

松岡敬介

菅獅子舞後継者育成

佐保田五郎

「たべ」の「た」について

阿部健治

佐島の「御船歌」と「へらへらだんご」

永田泰祐

相模国府祭

祖父川精治

神奈川モノツクリ紀行

徳山泰子

中郡二宮町梅澤ばやしの指導にあたって
浦賀の虎踊り 下田誠一
ニユース・伝言板 保田晴男
・協会事業報告・会員活動紹介・編集後記

平成二十年度（二〇〇八年度）第73号
会長挨拶

「創立四十周年を迎えるに当たって」
神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬 渡邊直哉
民俗芸能散歩(12)三浦市①
特集
「協会表彰」報告

「協会表彰を受けて」
足柄ささら踊保存会 菊川タミ子

「獅子舞五十二年」
太田和上氏子青年 鈴木 茂

「高等学校郷土芸能発表会」報告 事務局
神奈川県民俗芸能協会創立40周年記念
事業

「かながわ民俗芸能大会」かながわ
の神代神楽大会」事務局

平成20年度新規団体会員紹介
市場神代郷神楽萩原諄夫社中

代表 萩原諄夫
入谷歌舞伎会 会長 吉川正昭

愛甲ささら踊り盆唄保存会 会長 青木 惇
長谷ささら踊り盆唄保存会 会長 井上真弓

鶴見の田祭り 代表 滝澤弘一
見学会参加記

秋川歌舞伎見学会に参加して 松岡敬介
会員だより

子供は神の子―百五十年目の邂逅 徳山泰子

沖繩多良間島の八月のおどり 祖父川精治

「たべ」の「べ」について 阿部健治
ブルーシートと郷土再生 山田たかし
甕った鉛屋踊り 永田泰祐
協会事業報告 事務局

平成二十一年度（二〇〇九年度）第74号
追悼文

「後藤 淑 前会長のご逝去を悼む」
会長挨拶

「今後の活動に向けて」会長 石井一躬
特集・協会創立四十周年記念事業報告

「かながわ民俗芸能大会」かながわの
お神楽」報告

かながわの民俗芸能大会 かながわの
お神楽大会に参加して
足柄ささら踊保存会会長 内田幸子
大会ボランティアとして思う

個人会員 松岡敬介
「かながわ民俗芸能大会」かながわの
お神楽」の記録保存のボランティアと
して

個人会員 内田長志
「かながわ民俗芸能大会」かながわのお神
楽」に学生ボランティアとして参加して
昭和女子大学人間文化学部

歴史文化学科三年 太田章子
平成二十一年度新規団体会員紹介

与瀬祭礼芸能保存会 会長 柏木昭治
小田原離子北ノ窪保存会 会長 平井吉宜

報告「協会表彰」
ニユース・伝言板

協会事業報告
平成二十一年度理事会及び総会の開催

平成二十一年度民俗芸能見学会概要報告
・主催、共催、後援事業

平成二十二年度（二〇一〇年度）第75号
会長挨拶

自立の年を迎えて
神奈川県民俗芸能保存協会会長
石井一躬

特別寄稿
神奈川県民俗芸能保存協会自立化へ向けて
神奈川県民俗芸能保存協会事務局長
下田誠一

祝して
福島県文化財保護審議会委員 懸田弘訓
会津大学講師 田中宣一
民俗芸能の意義と継承
成城大学名誉教授 田中宣一
さらめくふるさと 二〇一〇かながわ民
俗芸能祭特集
誇りに思う郷土の芸能（かながわ民俗
芸能祭に出演して）
鍛冶屋鹿島踊り保存会 吉野保之
かながわ民俗芸能祭出演に思う
相模里神楽 垣澤社中
代表 垣澤 勉
かながわ民俗芸能祭「感想」
新城郷土芸能離子曲持保存会 会長 廣山秀治
良い経験となったイベントスタッフ
昭和女子大学 学生ボランティア
スタッフ 吉川綾乃
ボランティア・スタッフとして今思うこと
昭和女子大学 学生ボランティア
スタッフ 由衛若菜
裏方スタッフとして得たもの
昭和女子大学 学生ボランティア
スタッフ 小早川佳子
「さらめくふるさと 二〇一〇かなが
わ民俗芸能祭」に参加して
会員ボランティア・スタッフ 金子隆一
写真記録係のボランティアとして
会員ボランティア・スタッフ 伊藤昭久

さらめくふるさと 二〇一〇かながわ
民俗芸能祭 雑感
かながわ民俗芸能祭プロデューサー
中敷規正

平成二十二年度 神奈川県民俗芸能保存
協会表彰式

伝統を記録すること
相模人形芝居下中座 市川敬一
協会表彰を受けて
足柄ささら踊保存会会員 柏木景子
表彰を受けて
足柄ささら踊保存会会員 高橋とみ子
二十年を振り返って
焼亡の舞保存会会員 安藤弘子
焼亡の舞保存会会員 小林静子
民俗芸能散歩
鳥屋の獅子舞
鳥屋獅子舞保存会役員 荒井俊明
見学会参加記
第六十回全国民俗芸能大会見学会
会員だより
夜明け前―柳田國男への手紙 徳山泰子
チャッキラコ見聞録 永田泰祐
私とお神楽
相模里神楽 垣澤社中 白井良子
菊名あめや踊り復活物語
菊名あめや踊り保存会 菊池 恵
郷土芸能継承のために共に一歩を踏み
出そう 関根 訪
郷土芸能を残してゆくために―神奈川
県民俗芸能保存協会に期待する

山田たかし
飯田を見学 城所恵子
新生「かながわ民俗芸能大会」に期待
する 鈴木通大
民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

民俗芸能情報

「三戸のお精霊流し」 国重要無形民俗文化財に指定される
事務局長
平成二十二年事業計画
見学会・二〇一一年かながわ民俗芸能祭 事務局

平成二十三年度(二〇二一年度) 第76号
会長挨拶

新たな展開を目指して

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

さらめくふるさと 二〇一一年かながわ民俗芸能祭特集

二〇一一年かながわ民俗芸能祭出演の感想
箱根宮城野獅子舞保存会役員
稲葉親太郎

下九沢獅子舞・二〇一一年かながわ民俗芸能祭参加に際して
下九沢御嶽神社獅子舞代表 小川光一

かながわ民俗芸能祭に参加して
太田和上氏子青年 鈴木 茂

田祭りを振り返って
鶴見田祭り保存会会員 今泉 唯

神奈川県民俗芸能保存協会の中における沖繩芸能
川崎沖繩芸能研究会会長 長島清子

舞台のそでから
かながわ民俗芸能祭舞台監督
丹下 一

二〇一一年かながわ民俗芸能祭を見て
協会副会長 城所恵子

平成二十三年度 神奈川県民俗芸能保存協会表彰式

表彰をいただいて

下九沢御嶽神社獅子舞顧問 榎本重蔵

「伝統を継承する心」表彰状をいただいて

相模里神楽垣澤社中 塩川一美

協会表彰を受けて

内山剣舞踊り保存会会員 瀬戸文子

表彰をいただいて
相模人形芝居足柄座顧問 鈴木宏江

民俗芸能散歩

山北のお峯入り

お峯入り保存会会長 岩本章治

見学会参加記

平成二十三年度の見学会 松岡敬介

保存会だより

小田原板橋地域の小田原囃子と相模人形芝居の共演について

相模人形芝居下中座 三上芳範

神奈川フィルとの共演を終えて

相模里神楽垣澤社中 加藤美津枝

会員だより

日向薬師の神木登り 祖父川精治

三浦三戸の精霊流し 永田泰祐

郷土芸能・伝承者の「使命」 山田隆司

大震災から「郷土芸能」を見詰め直す 関根 訪

浦賀の「お稲荷さん」と「初午祭」

金子隆一

神様のいない十二月―神奈川フィル

と相模里神楽に教わったこと

徳山泰子

平成二十三年度 新規入会団体紹介

入会に際して

小田原市山王原大漁木遣唄保存会

代表 末広 勝

平成二十四年度事業計画

見学会・民俗芸能祭のご案内 事務局

平成二十四年度(二〇二二年) 第77号

会長挨拶

協会の現状と課題

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

さらめくふるさと 二〇二二年かながわ民俗芸能祭特集

民俗芸能の意義

民俗芸能の意義

大山阿夫利神社権禰宜 目黒久仁彦

民俗芸能祭に参加して

焼亡の舞保存会顧問 鈴木公子

かながわ民俗芸能祭に出演した子供

いなりっこ保存会会長 湊 不二雄

二〇二二年かながわ民俗芸能祭に参加して

武蔵野太鼓保存会役員 刑部武子

平成二十四年度 神奈川県民俗芸能保存協会表彰式

郷土芸能の大切さ

茅ヶ崎郷土芸能保存協会

会長 青木昭三

表彰をいただいて

鶴巻若衆囃子会会長 芦川 昇

受賞の栄誉に浴して

前鳥座座員 平野達雄

民俗芸能散歩

御霊神社の面掛行列

御霊神社禰宜 小林章子

見学会参加記

平成二十四年度の見学会

小論・小考

神奈川県における獅子舞文化

獅子博物館館長 高橋裕一

内川の虎踊り

横須賀市教育委員会教育指導課

川本真由美

日本獅子舞来由の考察

鳥屋獅子舞保存会役員 荒井俊明

竹本美尾太夫について

下中座座員 三上芳範

保存会だより

微笑と感動への道筋

お峯入り保存会会長 岩本章治

獅子舞に出会って―伝承芸能・記述書

作成への取り組み―

牛込獅子保存会会員 吉村俊介

第四十回相模人形芝居大会開催によせて

相模人形芝居連合会会長 山戸アサ子

「神楽舞と神楽囃子」のワークショップに参加して

里神楽ワークショップ受講生 佐野優子

会員だより

箱根板橋地蔵尊大祭 祖父川精治

子供達の「いなりっこ」の大切さ

永田泰祐

お峯入り―古代祭祀の面影― 保田晴男

伝統芸能に負けない「郷土芸能」 山田隆司

「有形のもの」にも目を向けた保存・伝承活動を

海に月 人の星―小田原囃子多古保存会とともに

徳山泰子

平成二十四年度 新規入会団体紹介

平戸古民謡保存会について

平戸古民謡保存会会長 三枝木信義

芝組／龍保睦木遣保存会

芝組／龍保睦木遣保存会

会長 佐久間博

事務局から

賛助会員ご紹介、平成二十四年度事業報告、平成二十五年事業予定のご案内

内ほか

平成二十五年(二〇一三年) 第78号

会長挨拶

創立五十周年に向けての現状と課題

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

さらめくふるさと 二〇一三年かながわ民俗芸能祭特集

良き思い出となった芸能祭参加

ちゃつきらこ保存会

事務局長 飯島重一

二〇一三年かながわ民俗芸能祭に参加して

平戸古民謡保存会会長 三枝木信義

さらめくふるさと二〇一三年かながわ民俗芸能祭に参加して

福田神社囃子獅子舞保存会

福田神社囃子獅子舞保存会

会長 柴田定満
かながわ民俗芸能祭に出演させていた
だいて

内山剣舞おどり保存会
会長 鈴木宏江

芸能祭参加で感じたこと

相模人形芝居下中座座長 林美禰子

平成二十五年 度 神奈川県民俗芸能保存
協会表彰式

表彰をいただいで

お峯入り保存会元会長 岩本章治

民俗芸能散歩

川崎・鶴見の沖縄芸能

川崎沖縄芸能研究会顧問 大城康彦

見学会参加記

平成二十五年 度 の見学会 松岡敬介

小論・小考

一人立ち三頭獅子舞の成り立ちを探る

獅子博物館館長 高橋裕一

一人立ち三頭獅子舞の源流をたずねて

鳥屋獅子舞保存会役員 荒井俊明

世附百万遍念仏の類似行事に関して

個人会員 角田武頼

保存会だより

本牧の「お馬流し」と木造祭礼船の復活

本牧神社本牧お馬流し保存会

本牧神社権禰宜 鶴岡和彦

会員だより

篠笛のススメ(笛師を育てて郷土芸能
を守る)

山田隆司

永田泰祐

新箸祝い

生麦の蛇も蚊もまつり 祖父川精治

椎葉村見学記/巡見より 小倉咲葉

一九三〇年代のサーカス 徳山泰子

平成二十五年 度 新規入会団体紹介

金津流横浜獅子躍自己紹介 吉田泰久

横浜雅楽会について 鈴木豪

厚木市郷土芸能保存協会について
厚木市郷土芸能保存会会長 山口熱子
事務局から

賛助会員ご紹介、平成二十五年 度 事業
報告、平成二十六年 度 事業予定のご案内
内ほか

平成二十六年 度 (二〇一四年度) 第79号

協会運営に思うこと

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

さらめくふるさと 二〇一四かながわ民
俗芸能祭特集

民俗芸能祭に参加した私たち面神楽

海南神社面神楽保存神楽師会

元会長 笹本輝夫

さらめくふるさと 二〇一四かながわ民
俗芸能祭に参加して

茅ヶ崎柳島エンコ口節保存会

会長 杉山 全

二〇一四かながわ民俗芸能祭公演に際
して

善部妙蓮寺曲題目保存会

会長 田辺広行

二〇一四かながわ民俗芸能祭参加の思
い出

浦賀虎踊り保存会会長 高畑昌弘

かながわ民俗芸能祭出演後の感想について

伊勢十二座神楽獅子舞保存会

会長 嶋本一郎

二〇一四かながわ民俗芸能祭—今後に
期待するもの—

東京文化財研究所

名誉研究員 中村茂子

平成二十六年 度 神奈川県民俗芸能保
存協会表彰式

綾瀬さらさら踊り保存会の表彰を受けて

綾瀬さらさら踊り保存会

民俗芸能散歩

副会長 吉井キクエ

菊名の館屋踊り

菊名館屋踊り保存会事務局 菊池 恵

見学会参加記

平成二十六年 度 の見学会 松岡敬介

小論・小考

解散した「羽鳥秋葉講」

浦賀虎踊りの由緒

横須賀開国史研究会会長 山本昭一

「蛇も蚊も」について

生麦蛇も蚊も保存会会長 青木義雄

保存会だより

創立十周年を迎えて

安房の人形浄瑠璃復活をめざす会

事務局長 安田隆一

第五十六回関東ブロック民俗芸能大会
出演について

相模国府祭鷲の舞保存会

会長 吉川満徳

良き経験となった関東ブロック大会出演

相模国府祭鷲の舞保存会事務局

小内亮太

第八回獅子博物館賞受賞の感想

神奈川県立愛川高等学校

獅子舞授業担当者

三増の獅子舞の歴史と現況について

三増獅子舞保存会会長 小林利彦

会員だより

『村落劇場』・上田久七の小作品介绍—
演劇への入り口時期の五つの作品—

近藤政次

遊行寺の踊り念仏と二つ火 祖父川精治

「小久喜のさら獅子舞」近況

獅子博物館館長 高橋裕一

「へちま」に悩みを託して 永田泰祐

亀ヶ池八幡宮大祭での神前舞と神楽の
奉納 望月清志

郷土芸能大会考—その存在意義と将来
に向けて—

平成二十六年 度 新規入会団体紹介

茅ヶ崎市圓蔵祭獅子の由来

圓蔵祭獅子保存会会長 小室泰彦

事務局から

平成二十六年 度 事業報告、平成二十七
年度の見学会、民俗芸能祭のご案内ほか

平成二十七年 度 (二〇一五年度) 第80号

会長挨拶

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

二〇一五 さらめくふるさと かなが
民俗芸能祭特集

二〇一五 さらめくふるさと かなが
民俗芸能祭の感動

横濱興禅寺雅楽会会長 斉藤至廣

かながわ民俗芸能祭に参加させていた
だいて

上和田薬王院双盤念仏保存会

会長 遠藤功一

かながわ民俗芸能祭 田村ばやし出演
の思い出

田村ばやし保存会会長 四宮義一

感動の嵐でした—かながわ民俗芸能祭
に参加して—

小田原市山王原大漁木遣唄保存会

会長 末弘 勝

民俗芸能祭出演の機会をいただいで

相模人形芝居長谷座座長 山口熱子

平成二十七 度 神奈川県民俗芸能保存
協会表彰式

協会表彰をいただいで

栢山田植歌保存会元会長

中戸川ツネ子

調査報告書

相模人形芝居の歩み—(一)下中座

(二)下中座

(三)下中座

(四)下中座

(五)下中座

(六)下中座

(七)下中座

(八)下中座

(九)下中座

(十)下中座

(十一)下中座

(十二)下中座

(十三)下中座

(十四)下中座

(十五)下中座

相模人形芝居下中座座長 林美禰子
小論・小考

天保の改革による諸芸禁止・伝説の実像―小竹の人形芝居禁止伝承の検証

相模人形芝居下中座座員 三上芳範
明治三十年前後の東京人形浄瑠璃 東京朝日・寄席案内で十二年間

個人会員 近藤政次

相模人形芝居の歩み―(一) 前鳥座

相模人形芝居下中座座長 林美禰子

相模の大風まつり・座間の大風まつり

前鳥密の墓を訪ねて

平成二十七年 新規入会団体会員紹介

横浜興禪寺雅楽会

平成二十七年 新規入会団体会員紹介

度事業予定、民俗芸能祭のご案内ほか

平成二十八年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成二十八年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成二十九年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十一年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十二年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十三年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十四年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十五年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十六年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十七年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十八年 新規入会団体会員紹介

事務局から

だいて

足柄ささら踊保存会会長 内田幸子

平成二十八年 神奈川県民俗芸能保存協会表彰式

協会表彰を受賞して

祭り囃子愛好の会相模粹鼓會

調査報告書

相模人形芝居の歩み―(二) 前鳥座

相模人形芝居下中座座長 林美禰子

相模の大風まつり・座間の大風まつり

三浦三崎への小さな旅

鉄の獅子舞を訪ねて

草創期の横浜の謡曲・能楽 近藤政次

平成二十八年度 新規入会団体会員紹介

長井の祭木遣唄井尻木遣保存会

事務局から

平成二十八年度事業報告、平成二十九

年度事業計画ほか

平成二十九年度 (二〇一七年度) 第82号

ごあいさつ：協会あれこれ

神奈川県民俗芸能保存協会会長

石井一躬

二〇一七 さらめくふるさと

かながわ民俗芸能祭特集

感動・喜び・意欲を深めた かながわ民俗芸能祭への参加

鶴巻若衆囃子保存会会長 芦川昇

「二〇一七 さらめくふるさと」かながわ民俗芸能祭」に参加させていただいて

お峯入り保存会会長 池谷和美

かながわ民俗芸能祭に参加して

相模人形芝居足柄座 玉野美津子

二〇一七 さらめくふるさと

かながわ民俗芸能祭に参加させていただいて

小向獅子舞保存委員会

委員長 高橋克明

かながわ民俗芸能祭に参加して

長谷ささら踊り盆唄保存会

会長 井上真弓

平成二十九年度 神奈川県民俗芸能保存協会表彰式

「二〇二〇東京オリンピックと日本人の心のふるさと」県協会の表彰を受けて

相模里神楽垣澤社中 中山敏男

調査報告書

相模人形芝居の歩み―(三) 足柄座

相模人形芝居下中座座長 林美禰子

相模の大風まつり・座間の大風まつり

三浦三崎への小さな旅

鉄の獅子舞を訪ねて

草創期の横浜の謡曲・能楽 近藤政次

平成二十九年度 新規入会団体会員紹介

長井の祭木遣唄井尻木遣保存会

事務局から

平成二十九年度事業報告、平成三十年

度事業予定ほか

平成三十年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十一年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十二年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十三年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十四年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十五年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十六年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十七年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十八年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十九年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十一年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十二年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十三年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十四年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十五年 新規入会団体会員紹介

二〇一八 かながわ民俗芸能祭 出演

感想

相模人形芝居前鳥座座長 鈴木文雄

かながわ民俗芸能祭に参加して

愛甲ささら踊り盆唄保存会

会長 小泉慶晃

平成三十年 神奈川県民俗芸能保存協会表彰式

表彰された方々の業績

調査報告書

相模人形芝居の歩み―(四) 林座

相模人形芝居下中座座長 林美禰子

相模の大風まつり・座間の大風まつり

三浦三崎への小さな旅

鉄の獅子舞を訪ねて

草創期の横浜の謡曲・能楽 近藤政次

平成三十一年 新規入会団体会員紹介

長井の祭木遣唄井尻木遣保存会

事務局から

平成三十一年度事業報告、平成三十二年

度事業予定ほか

平成三十二年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十三年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十四年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十五年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十六年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十七年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十八年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成三十九年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十年 新規入会団体会員紹介

事務局から

平成四十一年 新規入会団体会員紹介

事務局から

「かながわの民俗芸能」第84号

令和2年3月31日発行

神奈川県民俗芸能保存協会

E-Mail kangawa@minzokugeinou.com

発行 神奈川県民俗芸能保存協会

印刷 中川印刷株式会社